

学内六報

2018.4.23

no.1509



入学式で祝辞を述べるロバートキャンベルさん (4月12日)



平成30年度役員等の紹介
平成29年度卒業式・学位記授与式
平成30年度入学式・大学院入学式
Go Global Gateway(国際総合力認定制度)とは?

平成30年度役員等の紹介

平成30年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長

(任期)平成27年4月1日～平成33年3月31日

五神 真

理事・副学長

福田 裕穂

(担当)総務、入試

石井 洋二郎

(担当)教育、学生支援

羽田 正

(担当)国際、IR

小関 敏彦

(担当)研究、施設、産学協創研究

松木 則夫

(担当)財務、男女共同参画、広報、環境安全

理事

境田 正樹

(担当)コンプライアンス、監査、病院

里見 朋香

(担当)事務組織、法務、人事労務

監事

澤井 憲子

服部 彰

大学執行役・副学長

相原 博昭

(担当)財務改革、学術研究長期戦略

有信 睦弘

(担当)研究倫理

大沢 真理

(担当)地域連携、文書館、周年対応方針

熊野 純彦

(担当)図書館

藤井 輝夫

(担当)社会連携

光石 衛

(担当)研究力強化、環境安全

渡部 俊也

(担当)産学官協創

副学長

白波瀬 佐和子

(担当)国際、情報発信戦略

関村 直人

(担当)国際、日本語教育

森山 工

(担当)総合的教育改革、人文社会科学振興

吉村 忍

(担当)産学協創振興

副理事

奥抜 義弘

(担当)柏地区整備、柏地区事務機構長、イノベーションコリドー

梶 正治

(担当)男女共同参画

紺野 鉄二

(担当)業務改革、文書館事務総括、年史編纂

鈴木 敏人

(担当)経理・調達、研究費・研究不正対応

関谷 孝

(担当)スポーツ先端科学研究振興、広報戦略

平野 浩之

(担当)財務制度改革

山本 貴史

(担当)SDGs・社会実装

総長室顧問

杉山 健一

ステファン ノレーン

山田 興一

総長特別参与

沖 大幹

(担当)国際協力

橋本 和仁

(担当)科学技術制度

藤原 帰一

(担当)国際関係

総長特任補佐

有馬 孝尚

(担当)IR(総括・研究)、イノベーションコリドー

安藤 慶明

(担当)未来社会協創政策

伊藤 たかね

(担当)学部教育国際化

大江 和彦

(担当)病院担当補佐

太田 邦史

(担当)IR(教学)

大日方 隆

(担当)IR(管理運営)

小山 博史

(担当)IR(社会連携)

川崎 雅司

(担当)研究力強化戦略

坂田 一郎

(担当)総務補佐、運営企画補佐

佐藤 仁

(担当)国際広報、総務補佐

高橋 浩之

(担当)産学協創推進

出口 敦

(担当)柏地区整備

中村 宏

(担当)情報基盤整備

難波 成任

(担当)EMP



新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事、新大学執行役・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

大学経営のプロフェッショナルに

このたび、4月1日付けで理事を拝命しました里見朋香です。

平成18年に、法人化間もない本学で勤務させていただいて以来、2回目の勤務となります。当時は、五神真総長特任補佐と一緒に、小宮山宏総長の「東京大学アクション・プラン」を推進する立場でした。多くの部局の教授会を訪問させていただいたり、理事・副学長、部局長、総長補佐、総長室員、本部・部局職員など多くの方々と意見交換させていただきながら、一つ一つ課題を解決できたことは大きな財産となりました。

今回は、第3期中期目標・中期計画期間に入っており、五神総長が掲げられている「東京

大学ビジョン2020」の実現に向けて、職員の皆さんに「大学経営のプロフェッショナル」になっていただくお手伝いをするのが使命だと認識しています。業務改革も引き続き推進したいと思います。

東京大学のキャンパス・関係施設は広く全国に広がり、そこにも職員が働いています。本部に閉じこもらず、職員の皆さんのおられる現場にできるだけ足を運んで、話をしながら、職員の皆さんが自信と誇りを持って、明るく楽しく本学に勤務できるよう努めていきたいと思えます。皆様からの変わらぬご指導とご協力、どうぞよろしく願います。



理事

里見朋香

Tomoka Satomi

平成2年3月 早稲田大学法学部卒業
平成2年4月 文部省入省
平成7年6月 ミエール大学大学院修士課程（国際関係論）修了
平成18年4月 本学企画調整役 兼 総長秘書室長
平成19年7月 京都大学教育推進部長
平成22年4月 (独) 日本学術振興会審議役（基金担当）
平成24年1月 文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長
平成25年7月 文部科学省高等教育局大学振興課長
平成27年1月 文部科学省生涯学習政策局政策課長
平成29年4月 文部科学省大臣官房国際課長
専門分野：教育行政
趣味：家族旅行での名所旧跡美味めぐり、女性が主人公の映画鑑賞

健全な研究風土の醸成に努めます

2010年から6年間（最後の1年半は非常勤）監事としてお世話になりましたので東京大学には2度目の御奉公になります。大学執行役・副学長を拝命しました。間の2年間も経営協議会の委員として東京大学の経営に関わらせていただきました。

2014年の10月からは理化学研究所の理事として、研究コンプライアンス本部長や、財務、情報基盤、安全管理、外部資金、広報を主として担当しました。理研に異動直後の大仕事は、STAP細胞に関わる研究不正問題の処理・収拾でした。10月下旬に異動して、12月下旬には記者会見とあわただしい中で、併せてアクションプランの定着という地道な仕事を進めました。

幸いにして、私の在任期間には研究不正問題も起きずほっとしています。

東京大学でも研究倫理を主として担当します。国の政策の実行主体である国立研究所とは異なり、教育と研究の自由という基盤の中で、研究の健全性に組織として責任を持つ一番の拠り所は研究者の行動規範に基づいた倫理感だと思います。研究論文で示される研究の質は東京大学の質の指標でもあります。研究不正が起きる要因には根が深いものがありますが、この問題に地道に取り組んで、健全な研究風土の醸成に努めたいと思っています。御指導御鞭撻を宜しくお願いします。



大学執行役・副学長

有信睦弘

Mutsuhiro Arinobu

昭和46年3月 横浜国立大学工学部卒業（工学士）
昭和48年3月 本学工学系研究科修士課程修了（工学修士）
昭和51年3月 本学工学系研究科博士課程修了（工学博士）
昭和51年4月 東京芝浦電気（東芝）入社
平成8年4月 東芝研究開発センターシステムソフトウェア生産技術研究所長
平成15年6月 同執行役常務研究開発センター所長
平成18年6月 同執行役常務経営監査部長
平成20年6月 同顧問（平成22年3月まで）
平成21年4月 国立大学法人横浜国立大学理事
平成22年4月 国立大学法人東京大学監事
平成26年10月 独立行政法人（現国立研究開発法人）理化学研究所理事
専門分野：流体工学、原子力プラントの安全性評価、研究・技術企画・管理、経営監査等
趣味：水泳、エアロビクス

学知と経験知が会い新たな知を協創する——地域連携

本学にとって地域連携は新しいミッションといえるでしょう。2015年秋に公表された東京大学ビジョン2020には、社会連携という項目があり、そのなかに地域連携も含まれているはずですが、言葉としては出てきません。社会連携の一翼として地域連携が明示的に位置づけられたのは、本学が指定国立大学を目指すうえで構想調書です（2017年3月提出）。

新入生や新任の教職員の皆さんを念頭に、簡単に説明しましょう。指定国立大学は、日本の大学における「教育研究水準の著しい向上とイノベーション創出」を図るため、文部科学大臣が指定できるものです（2016年の国立大学法人法改正）。本学の構想調書は、「地球と人類社会の未来に貢献する「知の協創の世界拠点」の

形成」をサブタイトルとし、このテーマと合致する2030アジェンダ（持続可能な開発目標：SDGs）を最大限活用して行動計画を設定しています。そのなかで地域連携は、将来の社会問題解決を担う人材の育成を視野に入れて展開することとされています。

私なりに読み込むと、地球規模の種々の社会問題の実相は、地域において、それも遠い異国ならぬ日本の隅々に生々しく露呈しており、それらの実相にふれて課題を見据えれば、解決への筋道も姿を現してくる、という発想がそこはあると思います。学知と経験知の出会いが新たな知を協創する現場、地域連携がそうした取組となることが期待されています。

大学という空間、図書館という場所

本郷通りをすこし歩くと、塀の向こうでさらに樹々によって隔てられた一角があらわれます。それは都会のまんなかに残された自然のようでもあり、現在のただなかで息づいている、過ぎ去った時の名残のようでもあります。東京大学の本郷キャンパスです。

構内に足を踏みいれると、通りを行きかっていた音たちがやがて遠のいて、木々のあいだを吹きすぎる風の音が聞き分けられるようになります。空間が独特な色あいを帯びてきて、時間がとくべつな重みをもって積みかさなっていることが感じられます。大学は人びとのさまざまな活動とも空間を分かちあいながら、時間的なこの現在のうちで、とはいえ空間的な連続性をすこしだけ断ちきり、時間的な断層を含みこむ

かのように存在しています。

キャンパスの風景のなかでも図書館が、とりわけ大学のそうしたありかたを象徴しているかもしれません。図書館は時間の堆積を収蔵し、ちいさな森としての大学構内の全体が人びとに散歩と休息の空間を提供しているように、大学に集積された知のひろがりや深みとを、ひろく学外に開放する拠りどころでもあるからです。

大学そのものとおなじように図書館もまた、降りつもった時の果てに位置する現在に、わが身を適合させようとする時代を迎えています。そうした節目に図書館の運営の一端にかかわる巡りあわせとなりました。各位のご協力のもと職責をまっとうしてゆくと所存です。

大学と社会との新しい連携関係の構築に向けて

このたび社会連携担当の大学執行役・副学長を拝命いたしました。学内組織改編により、今年度新たに設けられました社会連携本部の本部長を務めさせていただきます。

社会連携本部は、これまで別々の組織として活動してきた渉外本部と卒業生室が社会連携部と統合されたものです。大学は社会からの負託に応じて知を生み出し、これを社会へ還元する、また知の実践を担う人材を育てるべき存在ですが、その活動を支える人的そして経営的な基盤を確立することがきわめて重要です。

そのためには、卒業生を含む個人や企業、団体、地域等、広く社会との間で新しい連携関係を築くことが求められます。考えてみれば東大基金等への個人や企業による財政的支援と、校友会をはじめとする卒業生各位による大学への

支援とはオーバーラップする部分も大きく、支援をお願いする上でも一体的に行うことで相乗効果が期待できます。

一方、本学が生み出す知の社会への還元、具体的には卒業生への学習機会の提供や地域と連携した社会課題解決等の取り組みを進める際にも、本部組織が一元的に対応することにより、本学の総合力をスムーズに結集することが可能になります。

短期間でできることではないかもしれませんが、大学を取り巻く人的ネットワークを充実させ、社会全体で大学を支えていただくとともに、大学が社会を変える原動力を生み出す、という好循環を作り上げることに少しでも貢献できればと考えております。全学の皆様方のお力添えを賜れば幸いに存じます。

大学執行役・副学長

大沢真理

Mari Osawa



昭和51年3月 本学経済学部卒業
昭和56年3月 本学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
昭和56年4月 本学社会科学研究所助手
昭和60年4月 東京都立大学経済学部助教授
昭和63年10月 本学社会科学研究所助教授
平成10年4月 同 教授
平成27年4月 同 研究所長
専門分野：社会政策の比較ジェンダー分析
研究内容：1) 東京大学社会科学研究所・大沢真理・佐藤岩夫編『ガバナンスを問直すI・II』東京大学出版会、2016年2) (陳斌訳)「日本生活保障制度的反作用研究—基于2000年后“治理”的国际比较」『社会保障評論』1(3) (2017年)、116-134頁
趣味：料理

大学執行役・副学長

熊野純彦

Sumihiko Kumano



昭和56年3月 本学文学部卒業
昭和61年3月 本学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
平成2年4月 北海道大学文学部助教授
平成8年10月 東北大学文学部助教授
平成12年10月 本学大学院人文社会科学系研究科助教授
平成19年4月 同 教授
平成24年4月 同 副研究科長・評議員
平成27年4月 同 研究科長・文学部部長
専門分野：倫理学ならびに哲学史
研究内容：1) 「カント美と倫理とのほざまで」講談社、2017年2) 『マルクス 資本論の哲学』岩波新書、2018年
趣味：夢をみること

大学執行役・副学長

藤井輝夫

Teruo Fujii



昭和63年3月 本学工学部卒業
平成2年3月 本学工学系研究科修士課程修了
平成5年3月 本学工学系研究科博士課程修了 博士(工学)
平成5年4月 本学生産技術研究所客員助教授
平成6年11月 本学生産技術研究所助教授
平成7年4月 理化学研究所基礎科学特別研究員
平成8年4月 理化学研究所研究員
平成11年4月 本学生産技術研究所助教授
平成19年2月 本学生産技術研究所教授
平成24年4月 本学総長補佐
平成25年4月 本学生産技術研究所副所長
平成27年4月 本学生産技術研究所長
専門分野：応用マイクロ流体システム
研究内容：1) Fujii, T.: "PDMS-based Microfluidic Devices for Biomedical Applications", *Microelectronic Engineering* 61-62C (2002): 907-914 2) Fukuba, T., Aoki, Y., Fukuzawa, N., Yamamoto, T., and Fujii, T.: "Microfluidic in situ Analyzer for ATP Quantification in Ocean Environments", *Lab on a Chip* 11 (2011): 3508-3515



グローバルな時代のグローバルな東京大学

このたび、副学長を拝命いたしました。担当業務は、国際関連と情報発信戦略です。東京大学は日本を代表する大学であることは国内外で周知のことですが、ヒト・カネ・モノが動くグローバルな時代にあつて、日本を超えた東京大学の位置づけは決して不動ではありません。これまで蓄積された伝統と強みを最大限に活かしつつ、新機軸の構築と具体化が急がれます。2017年度の東京大学卒業式の総長告辞は「変化を恐れず楽しもう」と題して、未来に向けた社会に巣立っていく卒業生へのエールが送られました。そこで鍵になるのは、変化を敏感に捉えて、変化を味方にできる研究・教育の環境整備と人材確保であり、そこには東京大学の「国際化」がさまざまな形で絡んできます。

これからの国際化とは国際交流を超えて、国際的な舞台上で積極的に働きかけ貢献できる若手を育て、優秀な人材を呼び込み（ヒト）、国際展開を可能にする教育・研究の環境を整えて（モノ）、そのための財源を調達し戦略的に配分する（カネ）、ことに尽きます。長い伝統と蓄積があることは何にも代えがたい強みである反面、新しい変化の風に弱い面もあります。国際化を進めるにあたっては、伝統と新機軸のバランスをとって、変化を先取りできるようなマンパワーが不可欠であり、そこでのダイバーシティが次なるステージにむけた扉を開ける起爆剤になります。微力ではありますが、グローバルな東京大学に向けて、少しでも貢献できると幸いです。



副学長

白波瀬佐和子

Sawako Shirahase

昭和56年3月 同志社女子大学卒業
昭和58年3月 お茶の水女子大学大学院修士課程修了
平成元年9月 コロンビア大学東アジア研究所・研究員
平成9年3月 オックスフォード大学 D Phil (社会学)
平成9年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
平成15年4月 筑波大学大学院システム工学研究科助教授
平成18年4月 本学大学院人文社会系研究科助教授
平成22年4月 本学大学院人文社会系研究科教授
平成25年4月 本学総長補佐
平成26年4月 本学総長特任補佐
平成27年4月 本学人文社会系研究科・副研究科長
平成29年4月 本学広報室長
専門分野：社会学（社会階層・少子高齢化・社会保障論）
研究内容：1) Shirahase, Sawako. *Social Inequality in Japan*. London: Routledge, 2013 2) Shirahase, Sawako. "Income inequality among older people in rapidly aging Japan." *Research in Social Stratification and Mobility* 41 (2015): 1-10.
趣味：絵をみること

学部教育改革の定着と人文社会科学の振興

このたび副学長を拝命いたしました。

本学では、平成27（2015）年度に新学修暦を導入するとともに、前期課程・後期課程において新カリキュラムの適用がはじまりました。これにより、学修システムの実質化（しっかりと学ぶ）、カリキュラム構成の適正化（自分から学ぶ）、学修体験の多様化（柔軟に学ぶ）を目指す体制づくりが実現されました。これは、「東京大学ビジョン2020」にも謳われている3つの基礎力（みずから原理に立ち戻って考える力、粘り強く考え続ける力、みずから新しい発想を生み出す力）の養成、ならびに国際感覚の涵養（世界の多様な人々と共に生き、共に働く力の涵養）とも響きあうものです。このような学部教育の改革は、しかしながら導入から3年を経て、その成果を検証する段階に

きています。検証作業を行い、必要に応じて調整を施すことで、中長期的なビジョンのもとで学部教育改革を定着させてゆきたいと思っています。

大学にとって、教育と研究とが社会から付託された二大事業であり、そうであるがゆえに大学が知の公共財としての役割を担うものであることは論を待ちません。教育については上述のとおりですが、研究については、人文社会科学の分野においてこれを振興し、本学における学術の多様な展開を支えるとともに、それを社会に向けて発信することを使命としています。そのためには、そうした取り組みを教育の現場にもフィードバックし、人文社会科学を専門とした学生たちの社会進出の機会を豊富化することも必要であろうと考えています。



副学長

森山工

Takumi Moriyama

昭和59年3月 本学教養学部卒業
昭和61年3月 本学社会学研究科修士課程修了
平成6年7月 本学総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）
平成12年4月 本学総合文化研究科助教授
平成19年4月 本学総合文化研究科准教授
平成24年4月 本学総合文化研究科教授
平成24年4月 本学総長補佐（～平成25年3月）
平成27年4月 本学副学長（～平成28年3月）
平成28年4月 本学総合文化研究科副研究科長（～平成30年3月）
平成29年4月 本学評議員（平成30年3月まで）
専門分野：文化人類学
研究内容：1) 森山工「マルセル・モース」岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学』ミネルヴァ書房、2018年。2) 森山工「アフリカにおける〈伝統〉の創造と変容」遠藤謙・関谷雄一編『社会人のための現代アフリカ講義』東京大学出版会、2017年。

SDGsで具体的な事例創出に貢献していきます

4月から、東京大学副理事を拝命いたしました山本です。これまでも東京大学TLOの社長として、東京大学のみならず大変お世話になりました。引き続き、東京大学TLOの社長とのクロスアポイントメントで、副理事としてのミッションは、SDGsの具体的な事例を創出することです。ご案内の通り、東京大学は、東京大学憲章に示した「世界の公共性に奉仕する大学」としての使命を踏まえ、地球と人類社会の未来への貢献に向けた協創を効果的に推進するために、未来社会協創推進本部を設置しております。

SDGs自体が、2015年9月の国連サミットで採択された比較的新しい概念であり、大学がSDGsにどのようにコミットするかということ

については、正解の無い新たな試みです。

そういう意味では、東京大学が世界の大学に先駆けて具体的なSDGsへの貢献の形を具現化することは、大変大きなチャレンジであり、大学の社会貢献の一つの形を指し示すことになります。

これまでTLOで接していただいた数多くの先生方の研究成果をSDGsという形で社会貢献に活かすというミッションは、責任重大であり、その使命の重要性を痛感しております。これは、東大関係者皆様方のご協力なくしては、決して実現し得ないことであり、これからも更なるご理解とご協力をいただきたく存じます。今後益々のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



副理事

山本貴史

Takafumi Yamamoto

昭和60年3月 中央大学経済学部卒業
昭和60年4月 株式会社リクルート入社
平成12年6月 同社退職
昭和62年1月 株式会社先端科学技術インキュベーションセンター（現・東京大学TLO）入社、同社取締役社長就任
趣味：相撲観戦（自称立会い評論家）、美術館のピンバッジ収集

退任の挨拶

このたび退任された理事、副学長の退任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

「知の協創の世界拠点」としての更なる発展に期待

前理事 **戸渡速志**

この3月末をもって4年半勤めました理事を退任いたします。在任中は濱田前総長、五神総長のリーダーシップの下、役員、大学執行役、研究科長、研究所長、そして部課長をはじめとする教職員の皆様に強力にサポートいただき、任務を遂行できましたことに心より感謝申し上げます。

五神総長の下、「東京大学ビジョン2020」に沿って大学経営という視点から、国立大学時代から続いてきた様々な制度の改革（財務制度改革、学内施設整備・活用の在り方の見直し、新たな産学協創の推進、事務組織改革、人事制度改革など）が進められました。また指定国立大学として新たな挑戦も展開されております。在任中、これらの一端に携わることができ、貴重な体験と勉強をさせていただきました。

今後、この改革の成果が大きく実り、教職員・学生の皆さんが生き生きとその活動を展開され、東京大学が「知の協創の世界拠点」として更に発展をされることを祈念しております。



退任にあたって

2015年4月より3年間、附属図書館長を務め、副学長・大学執行役として学術情報基盤整備を担当しました。この間、本郷総合図書館では新図書館計画のもと大規模な新築・改修工事が継続しました。図書館前広場地下の別館は昨夏に完成し、地下自動書庫も本年2月には運用を開始、そして本館も中央部分までの改修を3月に終えました。これも皆様のご支援・ご協力の賜物と深く感謝申し上げますと同時に、私の退任後も続く図書館工事へのご理解をお願い申し上げます。

前大学執行役・副学長 **久留島典子**

ます。

一方、こうした図書館空間の整備と同時に、第3期基盤的学術雑誌整備や学術資産等アーカイブズ構築などの学術情報基盤整備事業も開始・推進することができました。学術情報基盤は時間と人と資金を投入してはじめて磐石なものとなることを改めて強調し、東京大学における更なる学術情報基盤整備の進展を祈ります。

文化の土壌を耕す

2年3カ月の間、「人文社会科学分野振興」を担当させていただき、石井洋二郎理事・副学長のもとでワーキング・グループの座長を務めました。とくに重点を置いたのは、人文社会科学分野の多様で豊饒な知の積極的な連携による研究力の強化とその成果の国内外への発信です。前者については、振興の一つの拠点となるべき連携研究機構ヒューマニティーズセンターが設立されました。後者の一例としては、本学教員の著作を著者自らが紹介するサイト「UTokyo

前副学長 **田中 純**

BiblioPlaza」を開設し、日英二言語による情報発信を進めております。人文社会科学分野振興は、文系部局のみには限定されない、「大学という文化」全体の土壌を豊かにする活動です。この間に開拓したその他の振興策は後継組織に引き継がれます。今までご協力いただいた多くの方々に深く感謝申し上げますとともに、この土地に適切な肥料（＝資金）と光（＝注目）が与えられることにより、そこに根ざす研究がしっかりと生長することを願ってやみません。

キャンパスの未来に向けて

2年間務めてまいりましたキャンパス・施設担当の副学長を退任いたしました。多くの方々にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

この2年間は、キャンパスの各所で進む計画に監修という立場で関わり、デザインの方針や建物の品質などについてディレクションを行う一方で、施設維持管理計画の立ち上げに携わり、既存建物の維持管理や空間の有効利用のシステム構築を継続してきました。社会全体としては、既存ストックの利活用が大きなテーマであるにも関わらず、大学においては新規事業だけに目が行きがちです。そのような状況下で、施設維持管理計画が具体的なかたちを伴って動

前副学長 **千葉 学**

き出したことは、画期的なことと言えるでしょう。また五神総長が掲げる140周年記念事業の中で、図書館改修、中央食堂改修や山上会館改修が具体化したことも、こうした既存施設の利活用の姿として象徴的です。

今後のキャンパス計画においても、こうした過去の資産の活用と新規事業の複層的な姿勢はより重要度を増すでしょうが、さらに言えば従来型の発注方式や品質管理体制などの見直しも、経費削減と空間の質向上にとって不可欠です。それは次期体制に期待したいと思います。

平成29年度卒業式



平成29年度卒業式が、3月23日に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部（文系学部）と第二部（理系学部）に分けて行われ、第一部は9時15分、第二部は11時30分に開式しました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメントK138」より第一楽章の演奏後、総長をはじめ、来賓の方々、

理事・副学長、理事、各学部長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各学部の卒業生代表に、順次、学位記が授与され、卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代（第一部：教養学部 柏倉 沙耶さん、第二部：薬学部 西村 直人さん）から答辞が述べられ、式を終えました。



総長告辞

五神 真

本日ここに学士の学位を取得し、卒業式を迎えられた10学部、3,031名の卒業生の皆さんに、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。また、この日にいたるまで、長い年月、皆さんの成長を支えてこられたご家族の皆様方のご苦勞に対し、敬意と感謝の意を表します。本学が送り出した卒業生は、皆さんを含め合計282,994名となりました。

変化を恐れずに楽しもう

今、人類社会はかつてない激しい変化にさらされていると感じます。世界を駆け巡る情報を日々リアルタイムで手にする中で、その変化に圧倒され、怯んでしまうかもしれません。しかし、本日東京大学卒業を迎えた皆さんは、学生生活を通じて力を鍛えました。皆さんにとって、変化する社会は好機、チャンス、なのです。その変化を楽しむ気持ちを持つことが大切です。自ら考え、進むべき道を選びしっかりと歩んで下さい。そして強い意志をもって、人類の未来をよりよいものにすることに貢献してほしいのです。

こうした状況は、実ははじめての経験ではありません。150年前の1868年、明治維新

によって日本は世界に開かれ、以前とは比べものにならない量の人、物、知識や情報、そして富が国境を越えて一気に入ってきました。そして、それは同時に、日本が外の世界と、それまでにはなかった新たな結びつきを持つようになったことを意味していました。

東京大学は、その明治維新から9年を経た1877年4月12日に誕生しました。このとき期待されていたのは、国外から入ってきた文化や社会制度を導入し消化すること、そして新しい国家を担う人材を育てることです。すなわち、開国による大きな変化に立ち向かう日本を支えるという役割でした。注目すべきは、誕生間もない東京大学に学び、巣立っていった人々が、外からもたらされた変化に受け身で対応するだけでなく、変化を先取りし、自ら変化を作っていくという役割をも果たすようになったということです。この動きの先頭に立ったのは、明治維新の前後に生まれた、皆さんの多くと同じ年頃の若い人々でした。

変化は慣れ親しんだ日常を壊すもので、できれば避けたいと感じるものです。しかし、身をすくめて変化をやり過ごすのではなく、新しい時代を切り拓くために積極的に活用し、楽しむこともできるのです。さらに、自ら下した決断によって、あとに続く多くの人々に進むべき方向を指し示すこともできるのです。今この変動の時代に東京大学から巣立っていく皆さんは、これからの人生において、様々な変化に出会うでしょう。そこに立ち向かう際に参考になるものとして、変化を楽しむこ

とから生まれた可能性を身をもって示した、明治の若者たちの事例を、ここでいくつかご紹介したいと思います。

長岡半太郎の悩みと中国古典の再発見

皆さんは長岡半太郎という物理学者をご存知でしょうか。物質の構成要素である原子が、土星の形に似た、電子と原子核が分離した構造を持つという原子模型を、世界で初めて1903年に提唱しました。1950年に亡くなるまで、日本の物理学をその黎明期から先導した人物です。後進を叱咤激励することから「かみなりおやじ」とも呼ばれていたそうです。その長岡先生も、皆さんと同じ大学生のころ、日本の社会が大きくその姿を変えつつある時代と向き合い、自分の進むべき道について悩んだことがありました。物理学に進もうと考えていましたが、その選択が正しいのかどうかについて自信が持てなかったようです。

1865年生まれ長岡先生の世代は、幼少期には江戸時代の基本的な教養であった漢学をまず学びました。その後、中等教育から西洋式の教育を受けるという経験をしています。西洋の学問に接してみると、その内容は漢学とは大いに異なっており、特に自然科学ではそれが顕著で長岡先生を引きつけたのです。そこで大学では物理学を学ぼうと思いました。しかし、大学に進んでみると、専門の講義で東洋の研究者の成果が紹介されることは全くありませんでした。長岡先生はこの状況に不

安を覚え、「東洋人にはそもそも独創性がなく、欧米人の受け売りはできて、研究して成果を挙げることは出来ないのではないか。物理学に進むのは、一生を無駄にすることになってしまうのではないか」などと考えるようになりました。

今の皆さんであれば、日本からも毎年のようにノーベル賞受賞者が出ているし、東洋の学者に独創性があるだろうなどと不安に思うことはないでしょう。しかし考えてみてください。長岡先生が大学生のころ、そうした先例はありませんでした。模範と仰ぐべき先例が全くない中で、先生の悩みは深く、東京大学理学部に進学したのちに、1年間休学してしまうほどでした。

しかし、その間に、中国の古典をひもとき、古代の中国には西洋に先んじた科学上の発見があったことを見出しました。先生は、紀元前8世紀から紀元前5世紀までの出来事を記した中国の書物、『春秋』の中にある、「星おちて雨ふる」(星隕如雨)と日本で読まれていた一節は、正しくは「星おちて雨のごとし」と読まれるべきであり、流星を意味しているのだと理解していきます。また、司馬遷の『史記』には、「燭龍」と呼ばれる、北方の空にあらわれる戦の旗のような光の記事がありましたが、これがオーロラであることにも気づきました。西洋の学問に引きつけられ、自らの選択に思い悩んだからこそ、長岡先生は中国の古典から新たな発見を見出すことができたのだと思います。こうして先生は、「東洋人」も過去において大きな独創的成果を挙げていると確信し、物理学の研究に進むことを決意したのです。

根本に戻って考える

当時の日本は、軍事や産業において西洋に追いつくことが何よりも重要で、基礎科学を奨励する余裕はありませんでした。もし、長岡先生の世代が、この分野は西洋の成果を取り入れるだけで良いとして、自分たちが独創的な研究を行おうとしなかったとすれば、日本の学問はそこで停滞してしまったかもしれません。そのような事が起きても不思議ではない状況でした。しかし、その分かれ道で、長岡先生は、挑戦を決断し、危機をむしろチャンスに変えようとしたのです。相談する相手もいませんでした。そのような中で、前進するきっかけを与えてくれたのが、幼いころに親しんだ中国の古典だったというのは、

味わい深いエピソードだと思います。これは、漢学の素養と知識の上に西洋の学問が取り入れられたという、近代日本に極めて特徴的なことで、文理融合の見本ともなりうることで私は思います。

もちろん、だからと言って、皆さん全員に、今中国の古典を学びましょうと言いたいわけではありません。むしろ、大きな変化に際して重要な判断を下す必要があるとき、直面する現状とは時間的にも空間的にも離れた世界の知識が、予想もしない形で役に立つことがあるということを知ってほしいのです。皆さんが東京大学において学ばれたことの中にも、きっとそのような手掛かりがあるはずです。この事例からは、根本に戻って考えることの大切さも学ぶことができます。私は常々、学生の皆さんに「知のプロフェッショナル」となるための三つの基礎力について伝えています。第一は「自ら原理に立ち戻って考える力」、第二は、あきらめず「忍耐強く考え続ける力」、そして第三に、「自ら新しい発想を生み出す力」です。長岡先生は、「東洋人」の創造性ということについて、漠然とした印象で判断を下すのではなく、根本に戻り、根拠となるべき記録にあたって疑問に答えようとししました。まさに「原理に立ち戻って考える力」を発揮した模範です。知のプロフェッショナルには、大事な場面で的確な判断を下すことが期待されます。大きな悩みを抱いたときには、焦らずにある程度長い期間を取って、じっくり原点に戻ってみることも必要でしょう。

さらに重要なのは、このとき、日本に無数にいたであろう、長岡先生と同じような悩みを抱えた若者たちの、自身の将来を賭けて行った決断が、その後の日本の学問の道筋を作り上げていったという事実です。

基礎物理学の領域からは、二つの大きな流れが生まれました。20世紀に入ってから、物理学の基礎理論として量子力学が誕生しますが、日本の若い研究者たちはこれをいち早く学び、理学部・工学部に研究の拠点を築きました。第二次世界大戦後、トランジスターの登場によって半導体の技術的応用が強い関心を集めるようになったとき、その基礎理論

を咀嚼して産業界を支え、戦後の荒廃からの復興に貢献することになる研究者の集団が、すでに日本で育っていたのです。

また、基礎中の基礎といってよい原子核・素粒子理論の分野でも、若者たちは挑戦を続け、努力を重ねていきます。長岡先生は20年間にわたってノーベル賞の推薦依頼を受け続けた世界的にも希な科学者であり、推薦した人々はすべて最終的には受賞したという目利きの評価者でもありました。この長岡先生は、1940年の賞に対して、初めて日本の科学者を推薦しますが、それが、1949年に物理学賞を受賞することになる、京都帝国大学の湯川秀樹先生でした。敗戦後まもない時期のノーベル賞受賞は、荒廃した日本全体に大きな勇気を与えました。

山極勝三郎の人工癌と 忍耐強く考え続ける力

さて、長岡半太郎先生とはほぼ同世代の人々から、動物の免疫を発見した北里柴三郎、地軸の運動の α 線を発見した木村栄など、国際的な成果を挙げる人々が現れました。その中から一つ、山極勝三郎先生の癌研究を紹介したいと思います。

東京帝国大学医科大学の教授であった山極勝三郎先生は病理学者で、ベルリンでは長岡先生と共に過ごしたこともある、同世代の学者です。山極先生は多くの成果を挙げていますが、最も大きな業績は癌の研究です。当時、癌は、世界の医学界全体にとって、治療上も病理上も不明な点が多い難しい問題でした。切除するばかりの打ちようがなく、切除しても結果が良好なことはまれであり、有効な治療法が強く求められていました。

山極先生は、まず癌の原因を解明することを志し、当時有力だとされた刺激説の検証を目指して研究を進めました。刺激説とは、反復的な刺激が癌を起こすという説です。山極先生は兎の耳に毎日コール・タールを塗ってこすり、癌の発生の有無を確認しようとしてきました。結核という病を抱えた山極先生に代わって実験を担当したのは、東北帝国大学農科大学の畜産学科を卒業した市川厚一先生でし





た。動物にタールを塗って癌の発生を試みる実験はそれ以前にも行われていましたが、いずれも失敗していました。しかし、山極先生は十分に時間をかけていないのが失敗の原因ではないかと考えていたようです。

山極先生たちの実験は1914年4月から本格的に始まり、途中、湿気や寄生虫によって兎が死んでしまうといった事態に見舞われながらも、1915年9月には、ついに癌の症状を見せた3つの例を発表することが出来ました。結果的には、タールを塗ってこすることによる癌の発生には、100日から180日という、それまで行われてきた実験の常識をはるかに越える長い期間が必要だったのです。さきほどの「知のプロフェッショナル」の三つの基礎力の面からは、山極先生たちの成果は何にもまして、忍耐強く考え続ける力の産物だと言えるでしょう。

山極先生たちの成功は、若干の議論を経たのち、国内外で広く認められるようになりました。刺激説を裏付ける先例はありましたが、山極先生の研究は、癌の人工的な発生に史上初めて成功したという点で大きな意義があります。

人類初の人工癌の発生に成功した山極先生は、1925年、1926年などにノーベル生理学・医学賞に推薦され、1926年の選考では有力な候補として名前が挙げられました。前に触れた通り、日本から初めてノーベル賞受賞者が出るのは1949年のことですから、その20年以上も前のことです。惜しくもノーベル賞受賞には至りませんでした。山極先生の人工癌の発生は、現在も確固たる成果としてその輝きを失っていません。こうした業績が、大きな変化の時代であった明治維新から半世紀も経ていない日本で生み出されたことには、驚きを禁じ得ません。明治維新によって、学問の窓が国外に開かれたことを好機と捉え、世界の科学界に果敢に挑戦した若者が日本に

存在したことの意義は大きいのです。

青山胤通の癌研究会「開会の辞」と学知を通じての国際貢献

山極先生の研究が行われた当時の日本で、科学の基礎研究がどのように考えられていたかについても触れておきましょう。

山極先生の研究は、癌研究会という組織から支援を受けていました。癌研究会は1908年に誕生しています。その「開会の辞」には、日露戦争後間もない当時、日本の医学者たちが学問に寄せた期待と理想とがいきいきと語られています。これを記したのは、東京帝国大学医科科学学長であり、癌研究会会頭を務めた青山胤通先生でした。青山先生はこう述べます。

「今日は唯単に武力を以て国際間の同情と尊敬を受けると云うことはもはや出来ない時代になりました。又唯単に金力のみで国際間の同情と尊敬を受くることも出来ない。唯国民が文化に向って多大なる進歩を与える所のは国際間に於て尊敬と同情を得るのであります。もし此癌研究会に於て我邦の学者の研究が、欧米諸国の先進国の研究よりも、より多く、よりよい所の結果を得ましたならば、我邦の国際間に於ける同情と尊敬は、彼の数十億万の金を投じ、十数万人の人命を賭して得たる所のものよりも多かるうと思ひます」。

ここでいう「同情」とは「共感」のことでしょう。学問や文化への貢献は、十数万人の犠牲と巨額の資金を費やして得た戦争での勝利よりも多くの、国際的な尊敬と共感をかえるというのが、当時、癌を研究するために集った人々に共通する認識でした。

若き長岡先生は、自分が学問に貢献できるかどうか悩んだ末に物理学に進むことを決断しました。日露戦争後には、さらに進んで、多くの研究者たちが、学問や文化への貢献は、国際的な共感を得るうえで、何より重要であ

ると認識していたのです。一定の段階に達した国家が学問と文化に貢献することは国際的な義務であると考えられるようになっていたことが窺えます。山極先生の研究を支えたのは、学問がよりよい世界を作り上げることに役立つという同僚たちのこうした信念だったのです。

変化に立ち向かう挑戦と「母校」としての東京大学

東京大学に学び、果敢に世界に挑戦していた先輩たちと同じように、皆さんもぜひ、これから起こるであろう変化を、新しい挑戦によって道を切り拓くための好機と捉え、できれば楽しみながら、そして信念を持って、先に進んでほしいのです。ご紹介したとおり、勇気ある決断は、それを行なった人々のみならず、あとに続く人々をも奮い立たせることでしょう。

また、皆さんがこれからの人生の中で困難に直面し、助言や提案が必要になることもあるでしょう。そのときには、ぜひこの東京大学のことを思い出して、遠慮なく戻ってきてください。東京大学は、皆さんが的確な判断を下し、危機をチャンスに転ずるために必要な知恵と知識を提供する場であり続けたいと考えています。「卒業」は何かの終わりを意味するのではなく、皆さんと東京大学のつながりは永遠です。大学もまた、変化に臆することなく、むしろ変化を先導する姿を示し続けたいと考えています。今後も東京大学の活動に注目し、卒業生としてその歩みを支えてください。

卒業生の皆さんには、今後は様々な場面で、東京大学の作り手の側になっていただきたいと願っています。皆さんの知恵、これから社会で体得する知見は、東京大学をよりよくするための大切な資源です。よりよい教育と研究の環境を備えるために、卒業生だからこそできること、卒業生にしかできないことをぜひひしていただきたいのです。

最後に、本日ここを卒業し巣立っていく皆さんが健康であり続けるとともに、これからも東京大学での体験を活かして不断に学び続け、希望に満ちた明るい未来を切り拓くことを祈念します。

本日は誠にありがとうございます。

答辞

(第一部)

教養学部
柏倉沙耶さん



本日は、私たち卒業生のためにこのような盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。また、五神総長をはじめご臨席いただきました皆様、卒業生一同より御礼申し上げます。

大学1年の春、授業で使う教科書を書いた人が、目の前の教壇に立っている光景を目にして、自分が大学に来たことを実感しました。その冬、授業で初めて論文を書いたとき、言葉で人を説得するこ

との難しさを知りました。その1年後、レポートはその向こうに読み手が存在する短い書物であり、自分は書物と呼ばれるに値するものを書かなければいけないことに初めて気づかされました。そして、

学会発表を経験し、研究の内容だけでなくその価値を伝えることができ初めて、研究者としての責任を果たせることを思い知らされました。

様々な気づきを得るとき、そこには人との出会いがありました。熱く学問について語り合う友人、自分にはない才能をもつ友人、目を背けてしまえば楽になれるかもしれない間に向き合い続ける友人

答辞

(第二部)

薬学部

西村直人さん



本日は、私達卒業生のため、このような素晴らしい式典を催していただき誠にありがとうございます。ご多忙の折に、先生方、ご来賓の方々をはじめ、多くの皆様に御臨席を賜りましたこと深く感謝いたします。また、ただいま五神総長よりご告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、重ねてお礼申し上げます。

日本武道館での入学式から早4年、今日、この安田講堂で卒業を迎えられることに感無量です。光陰矢の如しを身をもって感じた学生生活でしたが、講義、ゼミナール、研究、課外活動など、この学

と出会いました。自分のそれまでの考えを打ち砕いてくる先生、信念をもって教壇に立つ先生、この人から学べることは全て学びたいと思う先生と出会いました。研究を始めたとき、自分たちの研究は、過去の先輩方が築きあげてくださった土台の上にあることを実感しました。研究を進めるうちに、大学に入る前の経験が活きていると実感し、昔の恩師と友人の

生生活を通して得られたものは私たちの人生の基盤となるような出会いと学びだと思えます。

私は前期教養学部は文科I類で入学しました。そこでは必修とされている語学、社会科学、人文科学のみならず、自然科学の分野の講義も履修する機会があり、幅広い学問分野の最先端に触れました。その中でも生命科学分野の講義で、神秘的とも思える生命現象も化学や物理学のシンプルな理論の積み重ねで説明しうる可能性があると感動し、その理論を医療への応用につなげることを目標とする薬学部への進学を決めました。前期教養学部で学んだ、分野の垣根を超えた幅広い知識や考え方、またそこで出会い切磋琢磨した友人は今でも多様な視点のあり方に気づかせてくれる私の財産です。

薬学は有機化学、物理化学、生命科学

顔が思い浮かぶ瞬間が何度もありました。

大学に入ってから様々な景色を見ました。どれもそれまで見たことのない景色でした。初めて見る景色を目の前にするとき、心が躍りました。「その山に登るのは、まだ見ぬ景色を見たいから」という言葉を胸に、まさにこの言葉の通り、まだ見ぬ景色を見たいがために、歩み続けました。そして、ここは、歩み続ける

などの基礎分野から臨床応用までを射程に含む複合的な学問であり、薬学部ではそれぞれの興味関心を持って進学した友人たちとともに、様々な専門分野を学びました。所属した研究室では、先生方や先輩方に丁寧に指導いただきながら、日々実験や考察に取り組んでおります。研究は先人が積み上げてきた壮大な知の体系の上に、自らの仕事を積み上げる営みであり、研究に携わることで、人類が培ってきた学問の世界の偉大さを痛感するとともに、いまだ定説のない曖昧な世界で証拠を集め、議論し、新たな知を確立していく果てしないプロセスにこれまでの人生では感じたことのないような難しさと面白さを見出しました。私は4月から大学院に進学し、現在の研究を継続して取り組みます。これまでに学んだ知識を生かし、またさらに学び、研究を通

ことでまだ見ぬ世界を見ることが出来る場所でした。まだ見ぬ世界を見るために、出会うべき人との縁を結んでくれる場所でした。

毎日が、始まりの日だと思える4年間でした。そんな日々を彩ってくださった方々と、いつも心の支えとなってくれた家族への心からの感謝を、答辞とさせていただきます。

じて先人の築いた壮大な知の体系に少しでも寄与するために尽力いたします。

私たちは今日東京大学を卒業し、それぞれの新たな活躍の場に進みます。卒業は終わりを意味するのではなく、卒業してからこそ東京大学の卒業生として期待される役割を各方面で成し遂げていく始まりだと思います。私たち卒業生は東京大学で得た知識や経験を活かし、また不断に学び続け、現代において人類社会が抱える幾多の課題の解決に向け主体的に取り組んでまいります。

最後となりましたが、これまでご指導いただきました諸先生方、学生生活を支えてくださった皆さま、温かく成長を見守り支え続けてくれた家族に感謝し、また東京大学のますますの発展を祈念して答辞とさせていただきます。

平成29年度学位記授与式



平成29年度学位記授与式が、3月22日に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部（理系研究科）と第二部（文系研究科）に分けて行われ、第一部は9時10分、第二部は11時25分に開式しました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメントK138」より第一楽章の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長

がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各研究科の修了生代表に、順次、学位記授与され、修了生に告辞が述べられた後、修了生総代（第一部：農学生命科学研究科博士課程 川井田 俊さん、第二部：教育学研究科博士課程 辻谷 真知子さん）から答辞が述べられ、式を終えました。

総長告辞

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。晴れてこの日を迎えられた皆さん、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。本年度は、修士課程2,990名、博士課程1,096名、専門職学位課程326名、合計で4,412名の方々が学位を取得されました。留学生はこのうち863名です。これまで長きにわたり、学業に打ち込む皆さんを物心ともに支え、この晴れの日をともに迎えておられるご家族、ご友人の方々にも、お祝いとともに、感謝の気持ちを伝えたいと思います。

東京大学は、昨年4月に140周年を迎えました。前半の70年は、開国によって、国際社会で認められるために、明治政府のもとで近代国家としての形を整え、それを担う人材を育成することからはじまります。そのために西洋の学問を旺盛に取り入れますが、その中で東洋と西洋の異なる学問を融合し新たな学問を作り出すという東京大学の伝統が築かれました。後半の70年は、敗戦の復興から始まります。20世紀後半は科学技術の革新を牽引力とし、工業化が進み、世界経済は飛躍的に拡大しました。その中で、日本は工業立国として、高度経済成長を達成し、世界有数の先進国としての地位を確立し、そして平和な社会を獲得したのです。東京大学は、最先端の学術を学んだ人材を社会の各方面に送り出し、ここでも、大きな役割を果たしました。

そして、今、東京大学は、「UTokyo 3.0」と名付けた次の70年のステージに向けて大きく飛躍しようとしています。皆さんは、まさにその歴史的な転換点に立ち、今東京大学を巣立つのです。

さて、2015年に国際連合は17の目標からなる「持続可能な開発目標=SDGs」を定めました。これは地球規模の課題が深刻化する中で、より良い人類社会を創るために、2030年までの行動指標としてまとめられたものです。かけがえのない地球を守り、全ての人を排除することなく取り込んで、自然環境や多様な文化を尊重し、調和の取れた発展を目指すという方針が掲げられています。これは、「世界の公共性への奉仕」を誓う東京大学憲章の精神にも合致しています。

ところで、東京大学は昨年6月30日付で「指定国立大学法人」に指定されました。私たちは、認定申請に際し、「個を活かし人類全体

が持続的・調和的に発展する社会」に向け『知の協創の世界拠点』となることを目指す行動プランをまとめました。

このなかでSDGsに着目し、具体的に行動を推進することにしました。そして、その司令塔として、未来社会協創推進本部（Future Society Initiative）を創設しました。現在、より良い未来社会のモデルづくりに向けて、広く日本の産学官民が力を合わせながら、世界に先んじて行動し、成果を発信する活動がはじまっています。

本日修了する皆さんには、ぜひこの「より良い未来社会づくり」の担い手になってもらいたいと思います。東京大学で学んだ知を最大限に活用して、次の70年の人類社会のあるべき姿を描き、それに向けた道筋をつけるために何をすべきかを考え、実際に行動を興してください。

私たちは今激動の中にいます。環境破壊やエネルギー問題、大規模テロ、世界金融不安といった地球規模の課題はいっそう顕在化しています。その中で、イギリスのEU離脱や、アメリカの政策の劇的な変化など、世界の政治、経済の不安定性が増していることを、皆さんも感じておられるでしょう。一方で、人工知能（AI）技術やビッグデータ活用などの新技術の急速な発展は、こうした変化を加速する要因になっています。この激しい変化の中で私達はこれからどう生きていくべきでしょうか。それが今、まさに問われているのです。

このような激動の社会だからこそ、大学という存在の役割はますます重要になります。東京大学も、維持すべきものと変わるべきものをしっかりと見据えて、前に進まなくてはなりません。本日、学位授与という学業の節目を迎えた皆さんと共に、現代社会における大学の役割について、少し考えてみたいと思います。

時を超越した真理の探究に 学問の真の魅力と役割がある

学問による人類社会への貢献とは、その時点の社会を良くするための活動だけを意味するものではありません。過去から未来へと流れる永い時間スケールの中で、時を超越した真理の深淵を探究することにこそ学問の真の魅力があり、果たすべき役割があるのです。ここで、100年以上の長期的な時間スケールの学問の例を紹介しておきます。

私は、昨年8月上旬、北海道の2つの施設を訪問しました。農学生命科学研究科の北海

道演習林と人文社会系研究科の北海文化研究常呂実習施設です。どちらも、息の長い研究に継続的に取り組んでいる拠点で、あわたたしく動く日常の中で忘れがちな時空の広がりや、落ち着いて捉えることの大切さを改めて感じました。

富良野にある北海道演習林は、1899年、木材生産のための林業の研究を主眼として設立されました。1950年代前半、第5代演習林長の高橋延清先生は、長期的な経済性と環境保全の両立という観点に立って、新しい林業モデルを提案しました。ある区域の樹木を全て伐採してしまうのではなく、老木や病気の木を中心に伐採し、森を若返らせるというものです。成長分だけを取獲することで、持続的に木材を得ることができるという林業モデルで、現在では広く普及している伐採法です。60年以上も前にサステナビリティの意義を見抜いた先達の慧眼です。

ところが、それが商品として経済に良い結果をもたらすかどうかは別の問題です。植林した木材を利用できるようになるには40～50年かかります。しかし、植林当時に植えた木が50年後に社会が求める商品になるとは限りません。木材の利用法や需要供給状況の変化などによって、樹木の持つ価値が変わってしまうからです。林学は社会の役に立つ実学の一つです。実学というと、短期的なものに目が行きがちですが、役に立つことをどのような時間スケールで測っていくかは、もっと本質的で人間的な問題です。長期的に見て初めて役に立つ実学も当然あるのです。その時点の経済性だけでは真に人類に役立つものを生み出すことはできません。実学としての林学には、材木を売ることだけでなく、国土保全、CO₂吸収、森の保健機能まで含め、長い時間スケールで未来社会を予測することが求められるのです。

さて、北見市の常呂は、ピョンチャンオリンピック大会で活躍した女子カーリングチームのホームグラウンドとして一躍有名になりました。オホーツク海とサロマ湖に隣接するホタテ養殖と畑作の町です。1956年、文学部の服部四郎教授が、樺太アイヌ語を話す人の調査にここを訪れました。その際、地元の考古学愛好家が、「海岸の砂丘の林のなかに大規模な遺跡があるので、ぜひ東京大学に調べてもらいたい」と訴えました。翌年、さっそく考古学の駒井和愛教授が発掘調査を始めました。以来60年にわたって、町と東京

大学の連携のもとで、学生たちを交えた研究実習教育が続けられています。1300年前にサハリンから南下してきた海洋民の「オホーツク文化」や、1000年前に漁労と雑穀農耕を営み、篋で擦って文様を付けた土器で知られる「擦文(さつもん)文化」がこの地で出会い、アイヌ文化まで連綿と続く遺跡の宝庫であることが明らかになりました。これは、日本文化というものは、決して均一のものではなく、地域において多様な文化が、混じり合い、並び立ち、あるいは競い合って発展してきたものであるということを知ることのできる貴重な遺跡なのです。

100年スケールの時間軸で捉える遺跡調査研究

常呂には、約104ヘクタールもの広大な土地に、3000基もの竪穴式住居の跡が凹みとして残っています。その地図を見ると、一部2ヘクタールほどの四角いくっきりとした空白の区域があります。これは、1970年代に、遺跡の学術的文化的価値が認知される前に、建築材料用の砂を取るための開発が入ってしまい、遺跡が削り取られてしまったものなのです。機械で砂丘を掘り返すのはじつに簡単で、何日もかからなかったことでしょう。これに対して遺跡の発掘は手作業で時間がかかります。発掘できるのは、年間数個ほどで、全部を調べるには途方もない時間がかかるのです。この遺跡調査研究もまさに100年スケールあるいはそれ以上の学術なのです。

100年スケールと言っても、それを実現していくことは容易いことではありません。私たちの限られた人生をこえて、想像力を受け継ぎ、次の世代の他者と協働していく必要があるからです。現代のテクノロジーが生まれる遙か以前から繋がれてきた先達の知恵というものを常に意識し、本来の価値に関する感覚を研ぎ澄ましておかねばなりません。東京大学にはそのような深い知恵に直接触れることができる資産がたくさんあります。大学はこのような長期的な課題にしっかり取り組むための貴重な受け皿なのです。

今、私達は目まぐるしく変化する時代に生

きています。このような時代だからこそ、目新しい技術や流行の概念のみを追い求めるのではなく、長い時間スケールで物事を捉え、その意義と価値を社会にきちんと伝えることが大切です。昨年訪問した、北海道の二つの施設で、こうした思いを改めて強くしました。

いま大学が永く維持すべきものについてお話をしましたが、一方で、私たちはかつて人類が経験したことのないスピードでの大きな変化に晒されています。この激動の中で、「人類全体が持続的に発展する社会」の実現に貢献するためには、単にその条件を分析するだけでなく、より良い社会に向けて自らが主体的に行動すべきです。そのためには、大学自身も変わらなければなりません。

今、大きな変化の原動力となっているのは、デジタル革命の急速な進展です。現在、多くの人がスマートフォンを持ち、世界中の様々な情報を瞬時に簡単に手に入れながら暮らしています。これまでにない膨大な規模のデータがサイバー空間に蓄積され続けています。そして、AI技術など、従来とは違った手法でこの大規模な情報を扱う技術も生まれつつあります。さらに、人を介さず物が直接インターネットに繋がるInternet of Things (IoT)が進むことで、物が生み出す情報も解析対象に加わるのです。これらの情報を繋ぎ合わせ、それらをリアルタイムで解析し、活用する時代もすぐそこまで来ています。ここでは、産業を含め社会や経済の仕組みは今とは随分違ったものになるはずですが、

その変化は必ずしも緩やかに徐々にではなく、飛躍として一気に、不連続にあらわれるでしょう。旧来の1次、2次、3次産業といった分類によらず、あらゆる分野の産業に、デジタル化の波が押し寄せ、遠隔地に分散していたものを繋ぎながら、スマート化に向かうと考えられます。

日本や先進諸国が経験した、工業化を主体とする経済成長は、労働集約型から資本集約型へと移行する中で生産性を高めるというモデルでした。この成長モデルは広く定着し、浸透していますが、これから私たちが迎えるのは、これとは異質なものです。価値の源泉

は物ではなく、膨大な情報とそれを整理した知識、活用する知恵の結びつきが価値を生み出すのです。いわば知識集約型の社会経済です。この知識集約型への転換が新しい成長モデルとなるわけですが、これは、旧来の資本集約に向けた成長モデルの延長としてではなく、劇的な変化を伴うパラダイムシフトによる成長となるでしょう。

このような状況において、大学の役割は既に質的にも大きく変わりつつあります。その代表例が大学と産業界との関わりです。東京大学では、毎年1800件を超える産業界との共同研究が行われています。これらの多くは、企業側で抱えている問題点などについて、共同研究の申し入れがあり、その問題解決を大学が手伝うというものです。それに対し、パラダイムシフトが進む中で、そのような従来型の産学連携では不十分になってきています。そこで、東京大学では、「産学協創」と名付けた新しい形の産学連携を始めています。

この「産学協創」においては、予め存在している問題に対する解決法を探るだけでなく、何を解くべきかという問いそのものから共に考え、そして協力して行動するという点が大きく異なります。こうした形で大学と企業とが手を取り合い論じ合うことで、新たな知を創り出すことはもとより、その知を確実に社会に拡げ浸透させていくことが可能になると考えています。すなわち、大学がこれまで以上に社会に能動的に関わり、さらに、産業界と協力をして社会に良い変革をもたらすために行動するのです。

過去を調べることから育むべき知の領域が見えてくる

「100年スケール」の学問を担っていくという大学の役割と、社会を良くするために大学が担うことになる新たな役割は、決して対立するものではありません。学問の持つ長い時間スケールは、今直面している大きな変化の中で、私たちがどう知恵をしばりどのような選択をすべきなのか、判断をする際の重要な支えです。過去を調べるということは、単に昔を振り返るということではありません。未来の姿を想像し、立ち向かうべき課題を予言し見通すということに繋がるのです。産官民と協創して社会の課題解決に粘り強く挑む活動から、長い時間スケールの中で新たに育むべき知の領域が見えてくると私は考えています。東京大学で学んだ皆さんには、様々な



場面で、このような大学の姿を社会に広く発信してほしいと思います。

今、大学の役割について述べてきましたが、知はそれを活用し、新しい社会を創る担い手がい初めて意味を持ちます。私は、知を創造し、知をもって人類社会に貢献する人材を「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。皆さんが手にした学位は、まさに「知のプロフェッショナル」としての資格を意味します。資格を得たということは、同時に責任を負ったということでもあります。これまでの努力に対して誇りを持つと同時に、社会から期待される役割を自覚して、謙虚で誠実であり続けることを忘れることなく、常に前に向かい、挑戦を続けてください。

皆さんが、激動の時代の中で挑戦を続けて

いく際のヒントとして、最後に将棋の世界の話を紹介したいと思います。

先日、あの羽生善治永世七冠に直接お会いする機会があり、AIに関する非常に興味深い話を伺いました。羽生永世七冠は、ご自身がAI技術に対して非常に大きな興味を持っており、将棋を通じてAI技術も研究しているそうです。AIがその膨大なデータ処理能力を通じて、人間が長年かけて築き上げてきた将棋の世界の境界をときに飛び越え、これまでとは違う将棋の姿を見せてくれるというのです。永世七冠の羽生さんの、新しい可能性と向かい合い、面白いと思って挑戦し続ける姿勢は、ぜひ、参考にしてもらいたいと思います。

本日、学位記を手にした皆さんの多くは、

これから東京大学を離れ、それぞれ違った進路を歩まれることとなるでしょう。東京大学は、皆さんの母校となり、新たな形で永遠の繋がりを持つこととなります。皆さんが、これからの人生の中で、何か厚い壁にぶつかるということもあるでしょう。もう一度、原理に立ち返ってみたいと思うとき、あるいは仲間たちと助け合いながら大きな課題の解決に挑戦し人類に貢献したいと考えたときなど、ぜひ、東京大学という「場」を活用してください。私たちはいつでも皆さんを歓迎します。

最後になりますが、皆さんが、今後益々、それぞれの分野でご活躍をされること、そして、皆さんの未来に幸多きことを心より祈念し、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。学位の取得、誠におめでとうございます。

答辞

(第一部)

農学生命科学研究科
川井田俊さん



(冒頭省略) 本日拝受いたしました学位記にはPh. D. すなわちDoctor of philosophyという言葉が刻まれております。このPhilosophyはギリシア語で「知」を意味する“Sophia”と「愛する」を意味する“Philos”を語源とします。この言葉のとおり、私たちは知を愛し、自然に潜む真理の追求と新たな知の創造を目指し、ときには寝食を忘れ、科学研究に取り組んで参りました。

私たちの研究内容は専門分野に応じて極めて多様ですが、その研究の第一歩が、先人たちの不断の努力の結晶である学術論文を読み解き、自ら探求すべき新たな課題を発掘することであったのは、どの研究においても共通

することではないでしょうか。先人たちが築き上げた知の体系は論理的で無駄がなく、洗練されたある種の芸術作品のように私たちの目に映りました。しかし、実際に研究活動に取り組んでみると、このように洗練された知を創造するための過程は、まるで険しい山道を歩むかのようで、多くの困難や挫折を経験しました。たとえば、得られた研究結果が仮説に反するとき、果たしてそれは仮説が誤っているのか、それとも仮説を検証する方法が間違っているのか、あるいは研究デザインに根本的な欠陥があるのかといったことを判断するために、多大な努力と時間を費やさなければならぬこともありました。また、周囲を取り巻く膨大な情報の波にのまれ、自分自身が何をわかっていて、何をわかっていないのかかわからない状態に陥り、研究が行き詰まることもありました。

しかし、私たちはこのような経験を通して、結果を客観的に解釈するとともに、論理を整え、

本質と関連のない情報を切り捨てること、科学研究の基本原則であることを強く認識するに至りました。また、科学研究と真剣に対峙する中で、研究を推し進める原動力はひとえに知的好奇心であるということに加え、その好奇心から、科学において最も重要な独創性が生み出されることを身をもって経験しました。このように、本学での研究を通して、科学的なものの見方や考え方、好奇心が科学の原点であるという知を得ることができたのは、これから新たな知を創造していく私たち修了生にとって、かけがえのない至宝であると考えております。

現在、世界では深刻な食料不足や環境破壊、エネルギー資源の枯渇、地域間格差、宗教対立といった様々な問題が顕在化しています。また、昨今の人工知能AIの急速な進化は、私たちの生活をより豊かにしていく可能性を秘めている一方で、とすれば人類が営む知的創造活動の存在価値に疑問を投げかけること

になるかもしれません。このような激動の時代の中、本日、学位を拝受した私たち修了生は東京大学を巣立ち、それぞれが社会への第一歩を踏み出すこととなります。しかし、どのような道に進もうとも、本学での研究を通して学んだことに加え、私たちに内発する好奇心と独創的な発想をもって知的活動を主体的に営むことで、我が国のみならず世界が抱える諸問題の解決や人類の発展に貢献できるよう、私たちは全身全霊をかけて邁進していく所存です。

最後になりますが、今日までの公私にわたるご指導ご鞭撻の数々を賜りました諸先生方、職員の皆様、互いに切磋琢磨してきた友人や先輩・後輩の皆様、そして日々私たちを支え励ましてくださったご家族の皆様へ修了生一同、心より厚くお礼申し上げます。皆様とのご清栄と東京大学のさらなるご発展を祈念致しまして、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

答辞

(第二部)

教育学研究科
辻谷真知子さん



本日は、私たちの修了に際しまして、五神総長をはじめ多くの皆様のご列席を賜り、このように盛大な式を催していただきましたこと、修了生を代表いたしまして心より御礼申し上げます。また、只今、五神総長から、温かい激励のお言葉をいただきましたこと、重ねて感謝申し上げます。

東京大学で学んできた私達に求められる役割の重さを、修了生のひとりとして感じます。私は保育について研究をしてきましたが、社会において、保育に対して求められる役割はさまざまです。一般的には保護者の就労との関係で語られることが多く、現に施設の拡充など改善されるべき課題も山積しています。

それらに埋れがちなことですが、保育の場ではまずそこで生活し育っていく子どもや、その育ちを考え、支えていく保育者の存在があります。そのような人々の姿を浮かび上がらせる役割を担っているのが研究者であるとも言えるでしょう。

研究の過程では、価値中立的であることの難しさや、言葉の重要性を学んできました。

教育学や保育学は、常に「人」に向き合う研究であるため、価値中立的であろうと努めていきましたが、思った以上に難しいことでした。私は「幼児の規範意識」というテーマに基づき子どもの思いを探求するとともに、様々な実践者や研究者との対話や議論を重ねてきましたが、その中で、立場により多様な視点があり、正解はひとつではないこと、また、考えの共有が非常に難しいかということを知りました。それだけでなく、自分が拠り所とする理論や概念にも、自分自身の生きる姿勢やこだわりが無意識に反映されていることに気

づかされました。単に「中立」を目指すのではなく、自分が何に価値を置いているのかを振り返り自覚する力が求められていたように思います。

また、議論や論文化の過程では、自分の表現に対し厳しく重要な指摘をいただくことや、自分の思考がうまく伝わらずもどかしい思いをすることがあり、言葉の持つ力や選び方の難しさについても多くを学びました。近年では、情報技術の発達もあって、ある言葉が大きな影響力を持ち、瞬間的に広がっていくということも起きてきています。その動きにただ合わせるのは容易なことですが。しかし私たち修了生は、研究という地道なプロセスを通して、長期的視野から解明していくことの大切さを学んできました。その成果を社会に還元していくには、たとえその時々流れには沿わないように思っても、各自が、冷静に、かつ謙虚に判断し発信していく役割が求められるのではないかと思います。

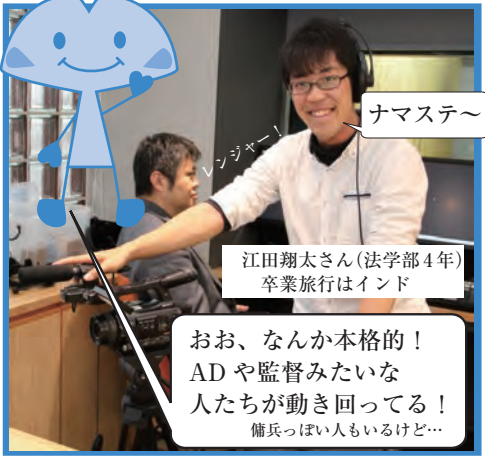
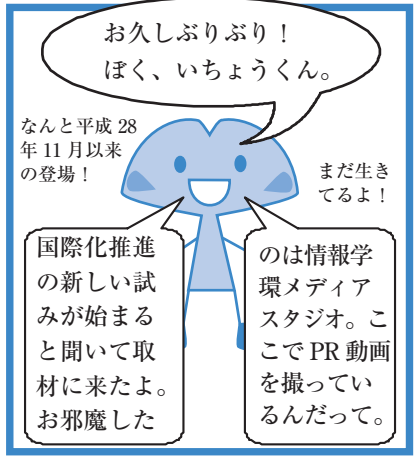
このように、価値中立性や言葉のあり方について気づくことができたのも、この東京大学において、様々な領域から学べる機会、院生同士でテーマを共有して時間や労力を惜しまず議論を深められるような環境が用意されていたからです。仲間も我が事のように真剣に考える院生たちからも大きな影響を受けました。本日演奏をしてくださった管弦楽団の一員であった頃も含め、周囲の人々に恵まれた学生生活であったと実感しています。専門的知識や研究方法を多く学んだ今でも、人を大切にし、物事の本質に対し真摯な姿勢で取り組んでいきたいと考えております。

最後になりますが、本日まで、研究者としてのあり方を自ら示しご指導いただきました先生方をはじめ、職員の皆様、日々の研究活動を支えてくださいました家族に重ねて感謝申し上げます。答辞とさせていただきます。ありがとうございました。

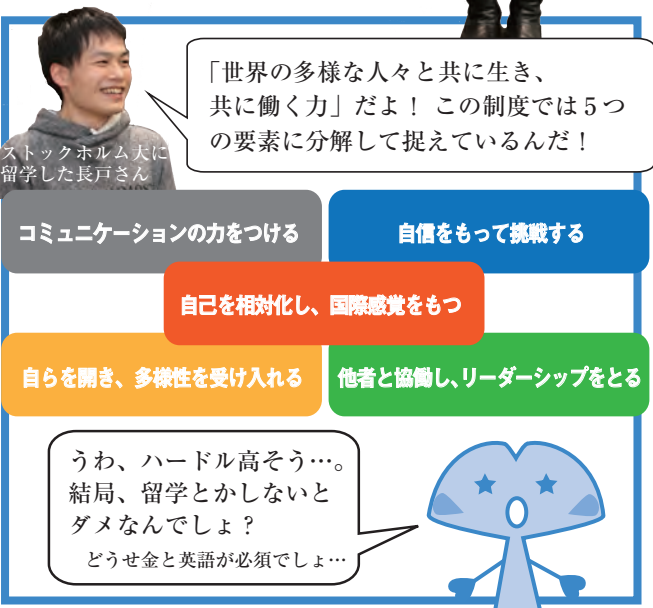
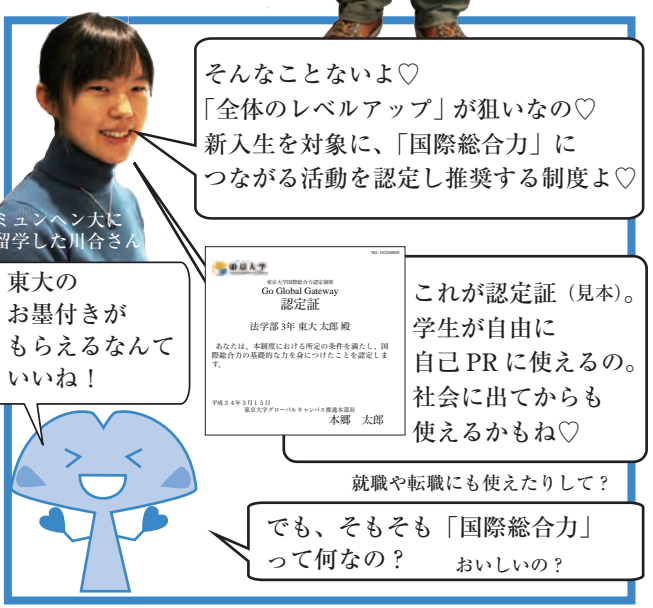
東大生の「世界の多様な人々と共に生き、共に働く力」を推進

Go Global Gatewayとは?

「ポップティピック」ばりの流用度の高さと♡の多さが特徴の「いちようくん」が読めるのは「学内広報」だけ!



※取材日 / 2018年3月16日





この春、東大生の国際化を全学で後押しする新しい仕組みが始まりました。それが「Go Global Gateway」。国際交流活動などに励んだ学生を大学として認定するとともに、活動を可視化したポートフォリオを学生ごとに提供し、自己PRなどに役立ててもらおうというもの。その制度の概略をマンガっぽくまとめ、制度を主導する先生のインタビューとともにお届けします。

◎「裸子植物界のスター」いち
ようくんにも励ましの
おたよりを→本部広報課(kouhoukikaku.adm@gs.u-tokyo.ac.jp)

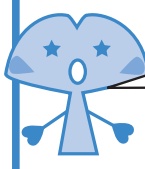


教育学部総代
だった川合さん

そんなことないよ♡右の表の4つのアクティビティのうち3種以上を行えばいいの♡母語以外の講演会への参加とか国際交流イベント運営とかも対象。

- activity 1**
外国語学修
前期課程外国語科目(初修・既修)の必要単位数取得/第三外国語の単位数取得
- activity 2**
授業・コース
授業科目の単位数取得/MOOCsの修了/研究・学習プログラム...
- activity 3**
海外経験
留学/フィールドワーク/インターシップ/ボランティア
- activity 4**
国際交流活動
外国語の講演会・イベントへの参加/本学の国際交流イベント運営/海外経験の発表/本学の国際交流PR活動への参加...

ふむふむ。「国際総合力」と言っても、留学に行ったり、難しい英語の論文を読みこなしたりするだけじゃないってことだね？



教育学部総代
ではなかった
長戸さん

もちろん！留学生との交流を楽しむとか、学内イベントへの参加とかでも「国際総合力」に役立つと認定申請レポートで十分アピールできれば、認定の可能性はあるよ！

なんと、海外に行かなくてもいいんだ！



海外体験や語学力だけが国際総合力を高めるわけじゃないからねっ♡



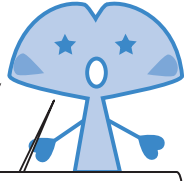
うげげっ！レポートが必要なの？面倒くさそう…。
もしや英語で書くとか？

400字程度だから心配不要だよ！
ツイート3つ分だね。
もう一つ、最初にGo Global Statementという作文の提出も必要だけどこれも400字程度！
もちろん日本語でOK。



でもかなり優秀だった長戸さん

ふーん。でも、認定証がもらえるだけだと、魅力が少ないかな。



バイオリンが得意な川合さん

活動記録をまとめて一覧できるポートフォリオが学生ごとにつくれるのも大きなポイントよ♡

そりゃいいね！卒業時に大学生活を有意義に振り返れそう。

さらに、認定を受けた人限定の留学プログラムや特別なイベントなども開催する予定だよ！



麒麟・川島似の長戸さん



そりゃいいね！国際総合力がどんどん高まっちゃいそう！
たとえいちようでも



でしょ♡ちょうど、制度のPR動画が公開されたばかり。詳しくはここ↓を見てね♡
www.u-tokyo.ac.jp/ja/administration/go-global/
江田くんががんばった♡

あ、これ、東大生じゃないと参加できないの♡ごめんね。
そもそも人間でないとい...



え~~~~~、せっかくその気になったのにい...

いわれなきいちよう差別では？
ハラちゃん(1507号参照)に相談しようかな。



よーし！ボクもまずはGo Global Statementを書いてみるよ！

まあまあ。これあげるから機嫌直してよ！



門
夏目漱石 芥川龍之介

「Go Global Gateway」にちなんで「門」関係の名作3冊セット！
2先生は東大の先輩だし

青春の
自立編
五木寛之

OK牧場！
閑々とせずに赤門から飛び出すんだもん！
∞ Possibilities lie ahead of me!



特集は次のページにつづく

担当教員に聞きました



総合文化研究科教授
国際化教育支援室長

矢口 祐人



→飛行機の搭乗券をモチーフにしたGO GLOBAL GATEWAYのPRチラシは、動画撮影、サイト構築にも携わった学生インタビューの江田さんがデザインしたもの……芸達者！



国際化教育支援室の室長として制度の立ち上げを主導し、PRビデオにも登場している先生に、前頁で登場の学生さん2人と広報課員が、直撃インタビューを試みました。教えて、矢口先生！

課外活動でもレポート次第では認定の対象に！

——いつ頃から検討を始めましたか？

矢口●総長の指示を受けて、2017年2月頃から国際本部で検討をはじめ、途中から総長補佐の先生方に議論に加わってもらいました。私が関わり始めたのは、国際本部のグローバルキャンパス推進本部への改組と国際化教育支援室の設立が決まった11月頃からでした。総長補佐の先生方の議論を引き継ぐ形で、国際部の職員をメンバーとするサポートチームと本格的な検討を始めました。

——こだわったのはどんな点ですか？

矢口●学生が主体的にグローバルな世界へ向かえるようにすることと、できるだけ多くの学生が参加できるようにすることです。語学が得意な人だけでなく、入学した全員がグローバル・マインドを持った人に育つ道筋にしたいと思いました。認定証はグローバルな視野を身につけるための入口で、目標はその向こう側にあります。大学からこれをやれというのではなく、学生がやりたいことを考えて実行する形を目指しました。アクティビティの表にない活動でも、認定にふさわしいことをレポートでしっかりと説明すれば認める可能性はあります。

——たとえば、外国の友達とカラオケで盛り上がる、でもいいですか？

矢口●うーん、さすがにそれだけだと難しいかもしれませんね。

長戸●留学生と食事するとか、好きなことの話をするとかから広がるのが国際総合力では？ アクティビティがフォーマルなものに限定されるなら残念ですが。

矢口●異文化の人と気軽なかたちでコミュニケーションをとり、心を通じ合わせるの大切ですが、実は難しいですね。それも国際総合力です。ただ、この制度は大学のプロジェクト。まずはキャンパスをベースに活動を考えてほしいんです。たとえば、理学部1号館東棟1階には大スクリーンを備えたオープンスペースがあります。思いつきですが、ここを使ったイベントを企画してはどうでしょう。ピ

ザでも食べながら皆でサッカーの国際試合を観戦する「W杯ナイト」とか。海外の映画を観る「国際映画ナイト」を企画してその国の文化が専門の先生をゲストに呼ぶとか。そんなイベントを企画して認定申請レポートにきちんと書いたらたぶん認められるでしょうね。

——「バーバリ・ナイト」はどうでしょう!? インド料理店と提携するとか！

矢口●まあ、教職員よりは学生に、やって楽しい活動を考えてほしいですね。

——参考にした事例はありますか？

矢口●他大学でも、指定された授業科目の単位の修得や留学した場合にポイントを付与し認定する制度を実施しているケースがありますが、学外の活動も含め学生の主体的な活動も対象としている事例は、あまりないようです。他大学では、一部の学生の力を伸ばす制度設計をしている場合が多いようです。

川合●TLPとかだと、相当レベルが高くないと無理だろうなと思っちゃいますね。

矢口●私の願いは、全1年生がGo Global Statementを書いてくれることです。

長戸●多くの1年生はグローバルな経験を経ずに入学します。書けるでしょうか。

矢口●Statementは、400字程度としました。当初は、もっと長いレポートを書いてもいいことを考えていましたが、チームの職員が実際に書いてみたら、なかなか難しいことがわかりました。何を書いたらいいか、学生たちが考えることのできるようなイベント等も企画しています。書き始めれば何とかなるはずですよ。

——最後に教職員にメッセージを。

矢口●各部局の様々な国際活動の情報を集約して学生に伝えたいので、ぜひ情報提供のご協力をお願いします。学生がウェブページにログインすると学内のイベント情報などがお知らせとして表示される仕組みがあり、自部局以外の学生にもPRができるようになります。部局で企画した会などを多くの学生に広く周知するチャンネルとしてもご活用ください。

平成30年度入学式・大学院入学式



平成30年度の学部入学式と大学院入学式が、4月12日（木）、日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には、約3,100名の新入生と、そのご家族など約5,100名、合わせて約8,200名が出席しました。午前9時45分、運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓のロバート キャンベル国文学研究資料館長、大塚陸毅東京大学校友会 会長が登壇し、10時40分に開式となりました。

音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、石田淳教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓のロバート キャンベル国文学研究資料館長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 上野史朗さん（文科三類）による宣誓が行われ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時50分に式を終えました。

午後の大学院入学式には、約2,600名の新入生と、そのご家族など約3,200名、合わせて約5,800名が出席しました。13時25分から運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の十倉好紀本学卓越教授／国立研究開発法人理化学研究所創発物性科学研究センター長が登壇し、14時20分に開式となりました。

音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、大久保達也 工学系研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の十倉好紀本学卓越教授／国立研究開発法人理化学研究所創発物性科学研究センター長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 都竹雄介さん（情報理工学系研究科）による宣誓が行われ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時20分に式を終えました。

平成30年度入学式 総長式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。ご列席のご家族の皆様にも、心からお慶び申し上げます。本日、3,132名が東京大学に入学しました。

皆さんが入学された東京大学は、明治10年、1877年に創設されました。そして、昨年4月12日に創設140周年を祝いました。この140

年は、明治から昭和前半の終戦を迎えるまでの約70年間と、戦後と呼ばれ平成にいたる後半の約70年間の二つの期間に分かれます。最初の70年は、新たな文明へと大きく舵を切った明治の初期にはじまり、第二の70年は第二次世界大戦後、国家と社会の体制が根本から転換したところを起点としています。それぞれのスタートにおいて、総合的な知に



東京大学総長

五神 真

基いて時代へ対応し、新たな挑戦をすることが、東京大学に求められていました。今日、世界の社会や文化が、大きく変動する時期を、また迎えています。その中で、東京大学が伝統の中で培ってきたものの方や作りあげてきた知見を、次の時代の新たな知の扉を押し開く力にしなければなりません。皆さんは、まさに第三の70年間の最初の年に、東京大学の一員になられたのです。70年という期間は、皆さんのこれまでの人生と比べてはるかに長いでしょう。この機会に、この歴史の時間スケールで、自分が今立っている位置を見直し、これから進むべき方向を考えてみてほしいのです。

変化の時代を楽しむ

現在は「変化の時代」だと言われます。それは、社会や思想が大きな転換期にあり、先が読めないこと、また、変化の速度が極めて速いため、その場の対応に追われてしまうことを意味します。この変化の時代に、私たちはどのように生きていけばよいのでしょうか。時代の流れに呑み込まれて右往左往していると、自分の立ち位置が自分自身にも見えなくなり、いつのまにか好ましくない事態にまきこまれてしまうでしょう。

古代ギリシアの哲学者プラトンは、そういった事態への対処について、晩年に記した書簡の中で、次のように論じています。「目の前で変転する政治や社会の状況に振り回されているとめまいを起こしてしまう。だから、一旦距離を取って、本当に大切なことが何かを見極めなければならない。そこでは、現状から離れた視点が必要なのだ。その視点こそが哲学である」と、そう言っています。皆さんがこれから取り組む学問は、そのような哲学の上に築かれているのです。すなわち、大学の学問とは、自分が今どのような場所にいるのか、どちらに向かうのかを冷静に考えるための思考の基盤であり、時代の変転に流されないための視点を獲得することなのです。もし、その場ですぐに役立つ知恵や技術が手元にないとしても、あきらめてはいけません。それを探求し、新たに創り出していく基本的な態度、知を求め愛する姿勢を、皆さんは東京大学で学んでいくからです。その姿勢こそが、変化の荒波を乗り越えるための指針となるのです。



変化の波の真ん中に放り込まれると、不安あるいは無力感に襲われ、守りの姿勢に陥りがちです。しかし、変化は時代が皆さんに与えた大きなチャンスでもあります。変化に合わせてようと追われるのではなく、自分も変化を作り出す一人として能動的に立ち向かい、ぜひこの絶好のチャンスを積極的に捉え、大いに楽しんでもらいたいです。

歴史に学ぶ

さて、今年はまだ、明治維新150周年にあたります。今、歴史に学ぶ姿勢がいよいよ大切になっています。ここで「歴史に学ぶ」とはどういうことか、考えてみましょう。

それは、単に歴史の諸事実を確認するというものではありません。過去を見直すことで現代へのヒントを探ること、そこから新たな価値を生み出すことを意味するのです。同じ出来事でも、異なる視点から捉え直されることで、その都度別の新たな意味が加わるのです。社会や学問の見え方も、時代ごと、年ごとに変わっています。長い時間の尺度で見渡すことは、私達が生きる現代について、その本質を見抜く目を養ってくれるのです。歴史的な視野を持つとは、決して静止したものを受動的に受け入れることではなく、躍動するものを能動的につくり出すことなのです。50周年や100周年という記念の年は、単に過去を思い出して祝うだけではなく、そこから現在を捉え直し、新たな時代を切り開く始まりになるのです。

想像力を働かせて知ろうとする者だけに、歴史はダイナミックな姿を見せてくれます。皆さんは東京大学での学びの機会を通じて、これからそのような様々な経験をしていくはずで、歴史から何を学ぶか、それこそが時代の変化に挑み、変化を楽しむために皆さんが持つべき視点なのです。

フェノロサと岡倉天心による日本美術史の発見

ここで、変化の時代を楽しんだ一人の先輩

を紹介したいと思います。そこから学問をどう作り上げていくかを学ぶことができるでしょう。

今から141年前、東京大学創設の年、1877年に文学部の第一科に入学し、1880年に卒業した文学部第1期生の中に、あの岡倉天心(岡倉覚三)がいます。文学部で「国家論」や「美術論」の論文を書き、英米作家の小説に熱中し、漢学・漢詩をよく学んだ岡倉は、後に日本美術史という新しい道を切り開いていきます。そのきっかけには、ハーバード大学を卒業し東京大学に外国人教師として招かれて、哲学や政治学を教えていたアーネスト・フェノロサとの出会いがあります。

幕末明治期には、西洋文明を急いで取り入れたいという機運の中で、「廃仏毀釈」とよばれる運動が起こりました。その中で、日本美術の価値が過小評価されていました。多くの仏像が打ち捨てられ、破壊されてしまうという状況が生まれてしまいました。かつて美術学校でデッサンと油絵を学んだこともあるフェノロサは、日本の古美術にも興味を抱き作品を収集し、研究していました。岡倉は、大学卒業後文部省に勤務し、フェノロサの京都や奈良への調査旅行に通訳を務めながら、度々同行します。そこで、現場で様々な古美術品を見てその保存状況等を知っていきます。岡倉はアメリカ人のフェノロサと共に行動し、状況をつぶさに観察する中で、外部から日本を見るという目を養い、日本美術独自の価値と時代への危機感に目覚めていきます。古いものの価値を外からの視点で捉え直し、それを積極的に活用したのです。この二人のコラボレーションは、この時代の主流となっていた日本文化軽視の風潮に抵抗して、日本が伝えてきた美術を再評価し、その保存と修復の仕組みを整えていく運動へと発展します。時代の空気に迎合するのではなく、それを吹き飛ばす新たな風を起していったのです。

中でも有名なエピソードは、法隆寺夢殿にある秘仏、救世観音(ぐぜかんのん)像の扉をついに開いた開扉(かいひ)でしょう。

1884年に法隆寺をおとすれた二人は、政府派遣の権限でその開扉を求めました。秘仏の扉を開けると仏罰が下ると信じていた僧侶たちは激しく反対します。しかし、それを押し切って、長年閉ざされていた秘仏をついに人々の目の前に出したのです。錆びた錠前を開け、扉の向こうに現れたのは、木綿の布が幾重にも巻きつけられた彫像でした。500ヤード（約450メートル）以上にわたる布を取り除き、ついに姿を現した救世観音像は、世界無比の存在感だったと言います。それは日本古来のすばらしい美が顕れた、痛快な瞬間でした。二人はその後、そのときの感激を語りひろめることで、新たな時代への挑戦を強く印象づけていきます。すぐ目の前にありながら、真価が分からずに闇雲に信奉したり、あるいは棄却したりしてしまっていた事物に対して、本当の美を評価する目の大切さを、この二人は実際の行動によって示したのです。それは、信仰の対象の中に押し込められていた仏像を「美」というあらたな視座から示したもので、世界の見方の転換でもありました。普遍性を目指す一つの学問が、新たに近代日本に生まれたのです。

相互に触発しあう交流

東京大学を卒業した時に岡倉は17歳、教師のフェノロサもまだ27歳でした。この若い師弟は、一緒に旅し、そこで感動を共有し、日本美術の保存と復興という目標を見出し、大きな役割を果たしました。国や言語を超えた師弟のこの協働は、既に明治の最初期から東京大学の知がグローバルな視点で探求されていたことを示しているのです。そしてそれが日本の文化や社会の新たな形を創っていったという、東京大学草創期の様子を伝えてくれます。教える側にいたフェノロサも、教えられる側にいた岡倉たちも、日本で新たな価値と出会いそれを吸収しつつ、相互に触発しあいながら、新しい知を作っていくのでしよう。時代の偏見や一時の流行に流されず、ときにインパクトやショックを楽しみながら

独自の生き方へと変えていく、その時代を生きた挑戦者のたくましさを感じられます。変化の時代に行われたこの知の創造と、そこで師弟の関わりは、大学という場での学びの本質を物語るものだと私は思います。

岡倉は後に、ボストンに赴き、フェノロサの収集品などを収蔵するボストン美術館の東洋部長として、活躍しました。そして、日本や東洋美術の価値を欧米に積極的に伝えました。また、中国、インドにも赴いて「アジア」という理念を打ち出し、日本をアジアの中に位置づけながら、そのあるべき姿を徹底的に考えたのも岡倉です。彼の考察は、有名な『茶の本』や『東洋の理想』などの英文著作として、欧米で刊行されました。彼は日本や東洋における美と文化のあり方を広く世界に発信し、それを通じて平和を訴えようとしたことがわかります。

岡倉は自由奔放で敵も多かったことから、同時代には多くの批判もありました。また、そのアジア主義が後に政治イデオロギーに利用された面もあり、彼の業績には毀誉褒貶が付きまといまいます。しかし、この先人の評価は近年大きく見直されてきています。批判や失敗を恐れず、変化と困難をバネに常に新しいことに挑み、近代日本において日本の文化の真の価値を世界に訴えた意義は、今日では国際的に高く評価されています。今、日本は、文明の真価が問われ、これまで私たちが培ってきた底力と発信力が試されています。変化を楽しみながら日本、アジア、そして世界の歴史を新たに作り出していった東大草創期の教師と学生との交流を、皆さんが今思い出すことは大変意義があることだと思います。その交流の現場を想像し、皆さん自身が、これから新たな知を作る現場に立ち会う糧として下さい。

大学で学ぶ

さて、大学に入ると、今までとはまったく異なる勉強や生活が始まります。今までは決められた課題が与えられ、それを着実にこな

していくことが求められてきたかもしれませんが。しかし、これからは違います。自分で問いを見つけ、自ら時間の使い方や対応策を考え行動することが必要になります。大学で学ぶとは、すでに出来上がったコースを進むことではありません。

新たな見方や価値を作り出ししていくためには、何よりも豊かで繊細な感受性が大切です。また、どのような学びの場を選ぶかが決定的に重要です。東京大学では、多様な講義だけでなく、様々なチャレンジの仕組みを準備して皆さんの参加を待っています。海外に出て語学や文化を勉強したり、ボランティアや社会活動に積極的に関わったりする機会も提供しています。これらは、とっつきにくく思われるかもしれませんが、とても貴重な学びのチャンスなのです。必修ではないからといって、見送ってしまうのはとても残念です。明治の時代に岡倉とフェノロサが創設当時の東京大学という場から飛び立って活躍したように、皆さんもこの東京大学という場を最大限に活用して、広い世界へと羽ばたいてもらいたいのです。

体験から学ぶ特徴的なプログラム

大きな夢を持って入学された皆さんが、学問研究に打ち込みながら、人間としても大きく成長するためのプログラムをたくさん揃えています。ぜひそれを存分に生かして下さい。そのヒントとして、具体的にプログラムをいくつか紹介しておきましょう。

まず、皆さんが異なる生活や文化・価値観に触れるための「体験活動プログラム」があります。数日から1ヶ月くらいの期間、主に休暇中に国内や海外の様々な場所でボランティア活動、就労体験、地域活動やフィールドワークに参加し、実地の体験をするプログラムです。自分が興味を感じるプログラムを探して応募し、事前の研修を経て現地に入って活動します。活動の後にはその成果を話し合う報告会もあります。説明会や応募締め切りは春にありますので、ホームページなどで情報を確認しながら、自分で計画を立てて参加してください。専門課程に進むと、より限定された領域の中で知識を深めていくこととなりますが、それに先立って、あるいは、それと並行して自分の関心を広げ、「体験の知」を生かしていく絶好の機会となるでしょう。



正規の授業では得られない貴重な学びの機会です。

もう一つ、昨年度から「フィールドスタディ型政策協働プログラム」が始まりました。グループに分かれた学生たちが全国の地方自治体と協働で地域の課題を考えるというプログラムです。学生が年に何回か現地に行ってその土地の生活を体験し、現地の人たちや役所の方々や議論し見聞を広げながら、提案をまとめて報告するものです。3月の最終報告会では、地域の視点に立つことで、日本や世界を見直す機会となったと言った、成果が披露されました。

こういった体験学習では、学年や専門分野を超えて、様々な仲間と一緒に活動する機会が得られます。これからの人生の糧となる貴重な出会いがあるかもしれません。人とのつながりは、いつも楽しいものばかりではなく、時に誤解やぶつかり合いを経験することもあるでしょう。ですが、そういったことを恐れては何も生まれません。厳しく楽しい体験を通じて得られた仲間や、指導を受けた先生方とその経験は、一生の宝となるものです。

世界を視野に総合力を身につける

皆さんは、これからの人生において、世界の人々と共に生き、共に働いていくことになります。そのためには国際舞台で自分の意思を伝える力を身につけておかなければなりません。なかでも、英語での書く力と話す力は、受験での受動的な学習では鍛えにくいものです。

教養学部長式辞

新入生のみなさん、そしてご家族のみなさま、その思い出に深く刻まれるであろうこの時をここに共有できることを光栄に存じます。そして本学への入学を許可された新入生のみなさんが、本当に東京大学で学んでよかったとの深い喜びを抱いて卒業の日を迎えられることを心から願い、そのために本学の一員として微力を尽くしたいと考えます。

新入生のみなさんは、これから駒場キャンパスにおいて学士課程の前半を過ごすこととなります。この春、教養学部の一員となったみなさんに、学部を代表して歓迎の意を表するとともに、この機会にその学士課程前半の



で、大学での学びが大切です。そのために、少人数クラスの必修コースを用意しています。理系はALESS、文系はALESAでアカデミック・ライティングを学びます。また、2015年にははじめたFLOW(Fluency-oriented Workshop)という授業は、英語で話し討論する力の獲得を目指すものです。7週間という短いコースですが、英語で話す自信と、その後自分でトレーニングし続けるためのコツを身につけることができます。

その他、国際的なトレーニングに役立つ多様なプログラムがあります。これらのプログラムを効果的に履修するために、「国際総合力認定制度」(Go Global Gateway) という制度を新たに設けました。いろいろなプログラムに参加し一定の基準を満たしたらそれを認定する制度です。ぜひ活用してください。

未知の体験へのチャレンジ

東京大学にはこの他にも素通りしてはもったいないプログラムがたくさんあります。これらの多様なプログラムを通じて、皆さんは大学で「知のプロフェッショナル」になるための基礎力を身につけ、自ら新しいアイデアや発想を生み出す力を培うことができます。

大学生として過ごす期間は、人生の中で決して長い時間ではありません。しかし、他の時期には得られない貴重な経験ができる、かけがえのない、濃密な時間です。気がつくに限られた時間はあっという間に過ぎてしまいます。そのことをしっかりと心に刻んで、大学生活を始めてもらいたいと思います。大学に入ると、新たな環境に慣れることや、授業についていくことだけで手一杯になってしまい、自分が知らない世界に入っていくことに躊躇するかもしれません。ですが、様々な場に自由に参加できるというのは、実は大学で過ごす皆さんの大事な特権なのです。新しいスタートを切った今、ぜひ未知の体験に果敢にチャレンジしてください。

皆さんがこれから充実した大学生活を送ることができるためには、まずは心身の健康が大切です。困ったこと、心配なことがあれば大学の教職員や仲間と相談しながら、前向きに対応していきましょう。皆さんが爽やかな大学生活を楽しめるよう、私たちはできるだけのサポートを行なっていきます。皆さんが、素晴らしい大学生活を送り、立派な東京大学の卒業生となる日を楽しみにし、皆さんの健闘をお祈りしています。

前期課程教育が持つ意味についてお話しておきたいと思います。

個別利益と社会全体の利益が両立するとは限らない社会

私たちは、無数の利害関係者が複雑に絡みあう社会の中に生きています。この社会は、特定の個人や集団の個別利益の実現と、社会全体の共通利益の実現とが必ずしも両立するとは限らない社会です。

たとえば、現在の世代のための開発は、地球温暖化、オゾン層の破壊、生物多様性の喪失、酸性雨、砂漠化等をもたらし、地球環境



東京大学教養学部長

石田 淳

の保護や地球規模の共有資源の保全を困難にして将来の世代の利益を損なうことがあります。それゆえに、環境保全にも配慮した節度ある開発としての「持続的開発 (sustainable development)」を求める動きが生まれました。

また、エイズ（後天性免疫不全症候群）、エボラ出血熱、SARS（重症急性呼吸器症候群）など、国境を越えて広がる感染症の撲滅は国際社会の共通の利益です。この感染症の撲滅には、医薬品の知的財産権を保護するなどして製薬企業がその研究・開発に取り組む経済的動機を作り出さなければなりません、逆にそれを制限することなしには、途上国で暮らす多数の患者に安価な医薬品へのアクセスを保障することはできません。こういった事情を背景として、先進国と途上国との間の知的財産権の保護をめぐる主張の対立が生じ、それにどのように折り合いをつけるかが論じられました。

さらに、領土、国民、憲法など、一国にとって価値あるものに対する脅威を、国家の政策を通じて軽減することはその国家の安全保障上の利益と位置付けられるでしょう。しかし、軍備の増強や同盟の強化は、現状の防衛に資するのみならず現状の一方的変更にも資するものです。現状の防衛を目的とする国家のみならずその一方的変更を目的とする国家さえも、目的実現のために軍備増強や同盟強化という同一の手段を選択するとあっては、選択された手段からその目的を推論できません。それゆえに、相手国の不安を掻き立てることなしには、自国の不安を拭いきることができないという「安全保障のディレンマ」が生じるのです。こうして守勢に立たされているという不安から、各国が軍備の誇示や先制自衛行動の検討をするなどして、結果的に互いの不信を増幅するような攻勢に出る事態もしばしば観察されます。東アジアの国際情勢も例外ではないどころか、むしろその典型かもしれません。

悲観や冷笑ではなく「勇気ある楽観」を期待

このように、地球上の人間の諸活動はさまざまなディレンマを私たちに突きつけています。そしてそれはいずれも深刻なものです。いま例に挙げた持続的開発や平和的共存など

も、たやすく実現できるものではありません。このほかにもみなさんの心に重くのしかかる現実、数えればきりがありません。しかし、この困難を前にして悲観も冷笑もみなさんを含む私たちの選択肢たりえないと考えます。むしろ、《勇気ある楽観》をみなさんには期待したいと思います。そしてこの困難な状況からの脱出口を切り拓いてもらいたいと思います。無論、この勇気ある楽観は、根柢の乏しい夢物語ではなく、学識豊かな判断力であり、そのような判断力を養うためにこそ駒場で過ごす二年間を最大限有効に活用することを願うものです。

社会が大学に大きな期待を寄せるのも、大学と「社会との連携」を高く評価してのことです。大学はその先端的「研究力」を通じて人間社会のディレンマ克服に有益な学術的知見を社会に提供するとともに、その教育活動を通じて学術研究の成果の意義を正確に理解できる人材を育成するという両面を持ちます。大学の持つこの二面が高い評価を受けていることは間違いありません。そのように申し上げたうえで、学術研究も、原子力の平和利用と軍事利用の例を引き合いに出すまでもなく、本来の研究目的の範囲を超えて利用される汎用性を持つことは自明ですから、それ自体ディレンマから逃れられるものではない、ということも付け加えておきたいと思っています。

私たちは、どれほど体格の良い個体であっても物理的にはしよせん世の中の一隅を占めるに過ぎない小さな存在です。もし私たちが、その想像力を自分で見聞きできる範囲を超えて広げることもできずに、ただ個人の、あるいはたまたま所属・居住する特定集団の短期的な利益だけを追求することに専心して、人類社会全体の長期的な利益を蔑ろにするならば、それは残念なことです。残念なだけでは済まずに、取り返しのつかないことになるかもしれません。

それゆえに、この春、駒場キャンパスにおいて大学生活を始めるみなさんには、前期課

程における学修を通じて、多様な利害が時空を超えて複雑に絡み合う現実を俯瞰し、その全体を総合的に考察する力を是非とも身につけてもらいたいと願っています。そして、広く世界を見渡し、未来を見据え、地球規模の、そして将来世代の諸課題に主体的に関与し、その解決に寄与する《地球未来社会の責任ある構成員》として活躍することを期待します。地球未来社会における共通の利益実現にむけ、グローバルな舞台を縦横に行き来し、他者とともに生き、学び、考え、働く、つまり「国際協働」を先導する存在となることを期待します。

人間の知的活動の地平が広がるにつれ、大学における研究・教育は専門分化しています。その一方で、学問領域の枠を超えて、断片的な知見を連結し統合する総合的な知的探究への活力も生まれています。専門分化と学際統合の動きを併せみれば、知的関心の多様性が知的探求の一体性を生み出している、と言えるかもしれません。

前期課程教育の本質は断片的な知見を統合する知的探求

私は前期課程教育の本質は、断片的な知見を連結し統合する総合的な知的探究にあると認識しています。教養学部が培おうとする教養も、多面的な現実を総合的に評価することを可能にする知の奥行き、広がりといったもので、それが人間の的確な判断力の基盤を成し、自由自在の発想を可能にすると考えます。変化のない時代には、専門領域に特化した知の分業は一定の合理性を持ちますが、今日のような急速な変化の時代には狭い専門に囚われることのない広い教養が力を発揮します。特定分野における未知の学識をひたすら吸収する勉強も必要ではありますが、それ以上に、既知の事物や事象を互いに関係づけて全体をとらえる視野の広い俯瞰力を獲得するために、駒場キャンパスでの二年間を充てることを願うばかりです。

東京大学教養学部の正門も、そのようなみなさんに対して開かれています。前期課程教育については既にみなさんは先週のガイダンス等で説明を受けていますから、それをここで繰り返すことはいたしません。ただおそらくその場では触れられなかったであろうことを一言付け加えておきたいと思っています。すな



わち、駒場キャンパスにおいてみなさんを迎える私たちの準備は、全体としてのカリキュラムから個々の授業等に至るまで、みなさんの大半を満足させる水準であると信じてはおりますが、私たちの想定範囲に縮こまる必要などありません。どうぞ遠慮なく私たちの

祝辞

いくつものハードルを越え、この大学を選び、そして多くの家族や友人の祝福を受けながら、今日ここに集まった新入生の皆さまに、心からのお祝いを申し上げたいと思います。わたくしは去年の3月まで、およそ多くの皆さまが生まれたであろう2000年から17年間、駒場の教養学部で日本の古典文学を教えていた者です。

わたくしはアメリカで育ち、皆さまとほぼ同年齢で日本語に出会い、その日本語を使ってどう生き、何を生業とするかを真剣に考えた末、日本文学の研究者になることを選びました。20代の後半に来日、幸いめざしていた学問の道筋と与えられた環境が一致したので、今日このように、一度も母語が通じ合える国に戻らず、豊富な文献資料と優秀な仲間にもまれ、励まされ、その資料が書かれたのと同じ日本語を通してすくすくと充実した日々を送ることができました。

しかし歳月は、いいことばかりを運んでくれるわけではありません。山や川よりも人の心、とくに心に測り知れず大きな力を及ぼす言葉のボーダーを越え、人と共に学び、働き、愛し合うことの難しさについて、気づかされることも多くありました。

わたくしが今も解決できずにいる2つの問いがあります。そこで今日、皆さまと一緒にそれらのことについて考えてみたいと思っています。

他者を理解しようとボーダーを越える人は否定されるのか

ひとつ目。人が他者を理解しようとボーダーを越えた時、その行為が寄り添うこととして喜ばれるのか、それとも行き過ぎた文化への立ち入り、英語でいう cultural appropriation に当たる無神経な模倣や真似として否定されるのか、その線引きが実はわかりにくい。

想定を悠然と凌駕してください。そのような学生あつての東京大学であることは私たちの誇りであります。

最後に、以下のことを強調して、私からの式辞を結びたいと思います。

性別を問わず、国籍を問わず、障がいの有

世界の、とくに欧米の情勢からすると、皆さまが成人になろうとする現在においては、友愛精神だけでボーダーを軽々と越え、文化を共有するなどという甘い夢は描けません。出会うその瞬間から、相手に関する確かな知識と感性が問われる時代になりました。

お金があり、文化へのアクセスも湯水のごとく自由になる社会の一部が、それまで抑えられてきた人々の領域に土足で立ち入る。アメリカの例でいうと、非白人系や少数の人々たちの歴史やライフスタイルを、そうではない人たちが利用し自分のものであるかのように資本として使うことに対する嫌悪や警戒心は、年々、募っているようにみえます。

つい先日、わたくしが生まれたニューヨークのブルックリン美術館では、アフリカ芸術部門の学芸員として31歳になるアメリカの白人女性を採用しました。美術史家である彼女の資格に問題はありますが、ニューヨーク市にある活動家団体は、白人であるということでのこの人事に反対しています。さらに自分たちのものでもない文化に越境して入り込み、ということは言い換えれば黒人などを排除してきた欧米における美術史という学問領域も、「美術館」という制度そのものも、legacies of oppression「抑圧の遺産」と見なして、さしあたりこの女性の即刻解雇を要求しています。

わたくしの知人で、長くドイツに住み活動を続けていらっしゃる多和田（たわだ）葉子（ようこ）さんという作家がいます。去年東京で会い、2つの文化を自在に行き来する彼女に対し、これらのことをどう思っているか問うてみました。すると、興味深い言葉が返ってきました。

多和田さんは数年前、福島原発事故に取材して作品を書きました。その際、当事者ではない人が本当には理解できないことだから書くべきではない、他人の苦しみを資本に小

無を問わず、本学において学生生活を送ったみなさんが、周囲からその確かな見識と勇気ある判断力とを信頼される人材として、日本社会のみならず国際社会の選択を牽引する存在となることを、心から願ってやみません。



国文学研究資料館長

ロバート
キャンベルさん

説を書き、金儲けするのはけしからんことだと思う人たちがいることを初めて知ったと思う。福島の人からみれば東京で生まれた彼女は確かに外部の人ではあるが、原発事故を題材に小説を書いているドイツ人たちから見ればまさに内部の人間に見えます。多和田さんいわく、「自分以外の存在になりきってみる、それができなければ文学は成り立ちません」とまで言い切っていました。

「日本人以上に日本を知っている」とはどういうことか

日本で日本文学の研究機関を率いるわたくし自身はというと、先ほど述べたアフリカ芸術が専門の白人女性学芸員に近いものがあるのかもしれませんが。わたくしはしかし、何千人もの日本人学生に、彼らの文化的支柱である古の文学を教えてきました。街に出かけては日本の民族衣装である着物を着流して歩き回っていても誰も文句を言いません。むしろ、「日本人以上に、日本を知っている」というシュールに聞こえるようなほめ言葉を向けられます。真似ることを文化創出の土台にまで昇華させた日本人だ、と考えれば最高の賛辞に聞こえますけれど、わたくしにはしっくり来ません。

アメリカで暮らすアフリカが専門の研究者と、日本にいる日本が専門の研究者との違いについて、それぞれが生きる地域の歴史に即

して、その背景を丁寧にほどいていく必要はあると思います。しかし、まず当事者であるわたくしにとって大事なのは、挨拶代わりに「日本人以上だ」などと褒めてくれる人の好意を受け入れながら、その気持ちに添わず、むしろ批判する能力を持つことだと考えます。「いえ、そんなことはありません」と答えるわたくしは、謙遜というよりも「日本人」って誰?、「日本人以上」とは論理的でないよね?という冷淡な抗いを込めています。同時にわたくしを前にした相手の、その時のおそらく偽らざる気持ちを想像すると、その気持ちに共感を寄せざるを得ません。そもそもわたくしは他者への好奇心から今のような存在になったのですけれども、文脈と場所によってわたくしのような存在は人を傷つけることもあり、新たな優れた表現や学び、あるいは学術的知見を生み出すきっかけになるのかもしれない。これから何かを学びながら、大きく変わるに違いない皆さまも、これから、他者と渡り合っていく一人ひとりのバランスを図らなければなりません。このバランスを支えるのは、他でもない、「教養」だと思います。

共感や思いやりは人の幸せに繋がるのか繋がらないのか

いま、共感といいましたが、わたくしがもう一つ釈然としない、ふたつ目の問いは、この共感に関すること。それは、共感や思いやりと言った誰もが否定し得ない衝動のような気持ちが具体的にどういう条件のもとで、人の幸せに繋がるのか、繋がらないのか、ということです。

教養とは、自分の経験から思いも寄らない他者の言葉にふれたり、前時代に起きたことに対して思いを馳せ、知ったりすることで自らを変える力を蓄えることだと考えます。むかし日本語で「おもいやる」と書くのに、「想像」、英語の「イマジン」を意味する2つの漢字を当てていました。自分ではない他者の痛みに思いをやる－「やる」は「派遣する」の「遣」と書きます－つまり送り込むことによって、自分のことをふり返る、内省する、前に進む能力を培います。ひっくり返るという共感、英語で言うエンパシーになります。

アメリカのオバマ大統領はかつて、世界の

紛争はエンパシーの不足から起きると演説のなかで指摘しました。イスラエルとパレスチナの問題は「お互いが相手の靴を履いて地上に立った時に初めて解決されます」(when those on each side "learn to stand in each other's shoes")、そういう名言を残しました。

しかし人の履き物を穿いて地上を歩き続けるのは中々しんどいことで、大抵の人はできません。日本は外から見ると平和で安定した社会に見えますが、中には多くの亀裂があり、先日新聞には、子供を持つ親の過半数が、所得格差による学習への機会がでこぼこになることを「仕方が無い」と答えたという調査結果を発表しています。朝ごはんも食べられないまま学校へ通う子供が大勢いるという現実も、日本の「見えない貧困」、可視化されない不公平を裏打ちしています。



ここに、徳川時代の江戸で出版された一冊の本があります。本草学者が書いたもので、タイトルは『豊年教種』。天保4年、1833年だから江戸市民が大飢饉に直面する最中に書かれ、流通した一種のサバイバルマニュアルです。読者に対して、一番困っている人たちにどう接触すればいいかということを説いています。「飢えたる人に粥を施すにハ、尤も恭しく謹(ん)で与へ」るべしと。お粥を作って、近所で飢餓に苦しんでいる人に食べさせる。その時重要なのは、普段より丁寧に手渡しをするということ。

「必々不遜(ぞんざい)にして人を恥(はずか)しむべからず。其(その)人の窮するも、全く天時の変によりて然らしむるなり」と。あなたから茶碗を受け取った人が困っているのは、気候や天災のせいであって、明日は我が身かもしれません。中国の『礼記』にあるように乞食が戸口に現れたとき「乞食だ、これを食え」と言われれば、その乞食もプライドがあれば「お前の飯なんか食わない」と言って黙って餓死してしまうかもしれない、だから相手の立場をよくよく汲みなさい、と忠告

します。「此ごとくなれば施(す)にも不遜(ぞんざい)にてハ陰徳にハならず、却て徳をそこなふ也」と。

人にいいことをしようとして、かえって自分の信用を落とし、幸福をすり減らしてしまう危険性を、この本の著者は有事の際にこそリアリティ溢れるディテールで述べ切っています。急いで多くのものをいっぺんに食べさせてはいけなく、飢餓者に熱いものを渡してはいけなく、というように、具体的で検証可能なファクトに基づき、他者への共感を呼びかけています。

今わたくしたちの目の前に広がる虚報、いわゆるフェーク・ニュースも、「共感」を煽ることでエビデンスとは無縁の主張をかかげ、その主張だけが人々を幸福に導き得るといった危険な環境に我々を追い込もうとしています。世界中に広がり、現に、生き死に関わる争いの引き金にもなっています。

さて、大学でできること。頭とからだを使って、自分が好奇心をもって向かおうとしている目標について他者に説明する言葉を磨くこと。ファクトを切り出して、論理と共感というきわどいバランスをその都度に練り出すスキルを身に付けることに尽きると思います。これが本来の教養であると、わたくしは考えます。



入学生総代宣誓

文科三類
上野史朗さん



新緑が萌え始める今日のよき日に、平成30年度東京大学入学式に出席できることを、私たち一同、大変嬉しく思います。

本日は、このような盛大なる入学式を私たち新入生のために催していただき

ありがとうございます。

また、この日を迎えることができましたのは、家族からの支援に加え、今まで私たちを支えてくださった方々の力添えによるものであり、感謝の気持ちで一杯です。

私たちは、まだ、学問的にも人間的にも未熟者です。これから、五神総長をはじめとする東京大学の教職員の方々や、親身的確かな助言をしてくださる先輩方のご指導を賜り、仲間とともに切磋琢磨して学問に励み、また、社会の責任ある構成員として力をつけ

ていきたいと思えます。

大学では、国籍、人種、価値観、知識や文化背景の異なる多様な人々と出会うことになるでしょう。偏見にとらわれない柔軟な思考力、多角的視点から物事の本質を見抜く眼力を養い、コミュニケーション能力を磨き、お互いを尊重し合える人格の形成を目指します。

そして、各々がその専門的分野において新たな課題に取り組み、研鑽を積み重ね、それぞれの分野においてプロフェッショナルとして活躍できる人材となれるよう努力します。

何事に対しても、何人に対しても、謙虚な姿勢で臨む気持ちを忘れず、常に感謝の心で精進します。そして、「世のため人のため」に、役立ち支えられる人間となれるよう努力することを誓い、新入生の挨拶とさせていただきます。

平成30年度大学院入学式 総長式辞

本日ここに東京大学大学院に入学された皆さんに、東京大学の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。また、ご家族の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

本年4月に東京大学大学院に入学されたのは、修士課程が2,959名、博士課程が1,126名、専門職学位課程が330名、合計4,415名です。皆さんは、これから始まる学びと研究活動への期待に胸をふくらませていることと思えます。

転換点にたつ人類社会

今年には明治維新から150年の年で、明治以来の歴史を思い起こす良い機会となっています。東京大学も昨年、創設140年を迎えました。この間の日本の近代化の歩みを振り返ることは、日本社会だけでなく、将来の人類社会のあり方を考える上で有益な示唆を得る機会となるはずで

今、人類社会は大きな転換点を迎えていると感じます。社会制度、経済活動、国際政治、科学技術などのあらゆる面において、かつてない大きな変化が起きているからです。しかも、これからの変化は遙かに短い時間の中で起こり、急激なものになることは間違いありません。

20世紀は科学の世紀と呼ばれ、自然科学がめざましく進歩し、そこから革新的な技術が次々に生まれました。人々は国境を越えて活動し、世界中の出来事を瞬時に知ることができるようになりました。20世紀後半には

この技術革新を牽引力として、工業化が世界中で進み、世界経済の規模は飛躍的に拡大しました。日本も高度経済成長を達成し、先進国としての地位と平和な社会を獲得しました。しかし、今こうした成長モデルは飽和の状態に達しつつあります。一方で、世界を見渡してみると、地球環境の劣化、地域間格差、金融不安、内戦やテロといった地球全体を脅かす課題がいつそう顕在化し、人類社会は不安定さを増しています。変わり方自体が変貌し、不気味さを感じることもすらあります。

この変化を加速している一つの要因が、デジタル化の浸透による科学技術の新たな展開です。その中で人と人との繋がり方や人と社会の関わり方が質的に変わってきていると感じます。そして、それによって、人類が数世紀をかけて構築してきた、資本主義や民主主義といった、社会を支える基本的な仕組みそのものが揺らいでいるのです。私達は、この変化の時代に起こっている様々な問題から、目を背けてはならないのです。

知識集約型社会への転換というチャンス

大きな変化の時代は、不安と危機の時代で

あると同時に、可能性とチャンスの時代でもあります。たとえば、私達がインターネットを日常的に使うようになってから、既に20年以上経ちます。この間に、サイバー空間上には、以前の想像をはるかに超える膨大なデータが蓄積されました。さらに、物を直接インターネットに繋ぐ技術、IoTにより、物が自動的に人を介さずに収集したデータも加わり、サイバー空間上のデータ量は加速度的に増大しています。その大量のデータをリアルタイムで人工知能が自動的に解析するような可能性も出てきています。こうした状況はデジタル革命とも呼ばれ、経済社会に、歴史的な変革をもたらし、第四次産業革命が到来すると言われていることは、皆さんも耳にしたことがあるでしょう。

私達が暮らすリアルな物理空間がサイバー空間と高度に結合し、人間それぞれの身体に経験的に刻まれた知恵と、公共的に蓄積された情報が高度に連結して新たな知と価値が生み出されるという可能性が見えてきました。すなわち知識や情報が価値の中心を担うような、知識集約型の社会です。さらに重要なことは、このような知識集約型社会への変化はこれまでの延長としてではなく、不連続で、



異質なものへの飛躍を含むパラダイムシフト、という形で起こると考えなければならないということです。

私はこの知識集約型社会への転換は、現代社会が抱えている様々な困難を乗り越えていくチャンスだと捉えています。都市と地方の格差が縮小し、老若男女、障害のあるなしを問わず、ひとりひとりの知恵と可能性が最大限に引き出され、皆が参加できる、今よりもむしろより良い社会に向かうきっかけともなりうると思うからです。

想像力を駆使して 大きな変化に備える

このパラダイムシフトが、人類社会をより良い方向に導くのか、それともさらに困難な状況へと導くのか、私達は分水嶺に立っていると感じます。では、この変革をチャンスとして活かすために私達はどうすれば良いのでしょうか。それを考えるために、一つの事例として、自動車の自動運転について、ここで考えてみましょう。

自動運転には、物流や人の移動についてコストを大幅に減らし、産業全体に大きなメリットをもたらす可能性があります。また、高齢者の移動や物資の配送などと結びつくことで、超高齢社会における人々の生活の質を大きく向上させるかもしれません。だからこそ、今のうちから、自動運転が応用され普及した状況について、想像力を駆使して描き出し、その恩恵や影響が各人にどのように及ぶのか、それを良く考えておくべきです。そして、その技術をみんなが安心して使えるように備えるのです。

さて、想像力を駆使して備えるとは、どういうことでしょうか。自動運転技術の柱は、いかに事故を起こさないようにするかという、危険の予知とそれを回避する仕組みです。走行中に周囲の状況変化を捉え、瞬時に適切な判断をするためには、高度な空間情報の認識と処理が必要です。3次元のイメージセンシングとそのデータ分析の技術が鍵となります。さらにそれだけでなく、実際の場面に即してどのように判断し、反応させるべきかというソフトの開発も重要です。実際の走行データを大量に集め、それを人工知能に学習させるという研究も進み、まさしく世界規模で熾烈な開発競争が繰り広げられています。

しかし、人々が安心して自動運転車を利用できるようにするためには、こうした技術の開発だけでは足りません。いかに技術が発達したとしても、起こりうる事故を完全にゼロにすることはできません。不幸にして事故が発生し、例えば自動運転の車に乗っていた人が怪我をした場合、その治療費等については誰がどのように責任を負うのか。そういったことについて、多くの人々が納得できる社会的なルールを構築することも、技術開発と同じぐらい重要なことです。これは直接には法学や社会科学の分野に関わるものです。

たとえば、自動運転のタクシーやバスに乗っている人が、事故にあつて怪我をするというケースを考えてみましょう。バスやタクシーに乗るということは、法的には乗客がバスやタクシーの事業者と契約、すなわち約束をするということです。それゆえ、安全に目的地まで運ぶという約束が守られなかった場合には、法的な問題が生じるわけです。そこに関わる責任をどのように整理し合理的に対処するかをルールを、あらかじめ決めておくことが必要になります。しかしながら、現在の民法には自動運転車の損害賠償について直接の規定はありません。

新しい法律をつくって国会で決めればよいではないか、と皆さんは思うかもしれません。しかし、法律をつくるためには、社会で現実に起こっていることをきちんと調べるとともに、どうするのが正しいことなのかについての議論を尽くさなければなりません。人工知能を含む新しい技術が、これからどのように社会に受け入れられて行くのかということも重要な論点です。そうした未来の社会像もふまえて、自動運転中の事故から発生する損害の賠償責任を、誰がどのような形で分担するのが公平で公正なのか、そうした議論を深めていくことが求められるのです。

他方で、これらの課題を警戒しすぎて、予防的に過剰な規制を課してしまうことも好ましくありません。自動運転が果たしうる将来の可能性を抑えてしまうことになるからです。

革新的な技術に基づいて新しい社会や経済の活動が生まれたときに、どこまでを民間の自由に任せ、国は最低限どこを規制すべきなのか、これは古典的な難問です。その難問を解決する際には、まず原理的な問題、公平あるいは正義とは何かという法学の基本的な知見に立ち返り、あるべき規制とは何かを考えることが必要になります。さらに、規制を課すことによる社会全体のコストの増減という、経済学的な観点からの判断も深く関係してくるでしょう。そして技術の限界や信頼性についての科学技術的知見も欠かせません。何より重要なことは、これら全ての知見を組み合わせて考えていくということです。すなわち、自動運転の車が引き起こす事故を想像し、その処理に備えるためには、文系理系といった枠を飛び越えた連携による研究と協働作業が不可欠なのです。

複眼的な視点から現代的な 問題に取り組む

東京大学は、文系の学部・研究科と理系の学部・研究科の両方を有し、さらに学際領域の多数の研究科を擁する総合大学です。多様な分野の最先端で活躍する多くの専門家を抱えています。そのため、今話題にした自動運転に限らず、新しい技術を社会に実装する際に生じる問題を深く研究し、総合的に検討する場として、他に類がない恵まれた条件を備えています。入学後の皆さんが、幅広い学習を通じて、従来の専門分野の垣根を越えて、複眼的な視点から現代的な問題に取り組む力を身につけ、そしてそれを実践されることを大いに期待しています。

文系理系の融合がますます重要になる分野はほかにも沢山あります。例えば、金融のシステムは、ブロックチェーンなどの新しいデジタル技術でがらりと変わるでしょう。また、国や地方自治体が政策を立案する際にも、データに基づく根拠が重視され、これまで以上に多様な調査結果を活かすことが求められます。そこでは、社会事象に関するビッグデー





タを扱うために、社会科学として積み上げられてきた社会調査についての専門知識と最新の数理データサイエンスの知見とを組み合わせることで考えていくことが不可欠になるでしょう。

基本に立ち返って考える 強靱な足腰を鍛えよう

社会において、次々に新しい問題が生まれていく中で、その解決のために大学は何ができるでしょうか、また何をすべきでしょうか。そのことを、皆さん自身も学びながら考えてください。新しい問題は、世の中の人々の注目を集め、われわれもそれに目を奪われがちです。しかし、大学は、問題を考えるための、基礎となる原理原則の考え方を探求し、「真理」を追究するために、時を超越した活動を行うことが許されている場でもあるのです。それによって、新しい問題の真の解決に立ち向かうことが大学に期待されているのです。

たしかに現在は社会の変化が非常に速く、新たな情報が次々に生まれては消えていきます。情報通信技術の進歩によって、情報拡散の仕方も大きく変わり、事実か「フェイクニュース」かの見極めに迷う場面も少なくありません。私達の毎日は溢れる情報を如何にさばくかが仕事になってしまっているようにも感じます。昔のように図書館に籠もって、書籍の匂いを感じながら先人の足跡を追うという機会はめっきり減りました。ディスプレイを見ながらキーボードを叩くことで、遙かに効率的に情報を得ることができることも事実でしょう。しかしこの便利さの中で、「知のプロフェッショナル」として備えるべき、強靱な足腰を鍛えることがなごりになってしまっていないでしょうか。うわべの情報に振り回されるのではなく、背後にある本質あるいは真理を見抜く力を養うには、時に立ち止まってじっくり考えることが必要です

例えば、さきほどの自動運転の例でも、民法が深く関わっていることに触れましたが、法をつくり整備することが社会にどう役立つものなのか、歴史を振り返ることで学ぶこと

もできます。

歴史を振り返って考える

民法の制定当時、明治政府は不平等条約の撤廃に向けて、近代的な法典の整備をする必要に迫られていました。しかし当時は、日本人の力だけでは世界に通じる法典の整備は困難でした。そこでフランスから民法の専門家ポアソナードを招き、民法典の原案を作成させました。しかし、このポアソナードが作成した民法典は、公布はされたものの、日本の伝統や風習と折り合いがつかず、議会を通すことができず、施行はされませんでした。その時、梅謙次郎を中心に、穂積陳重、富井正章の若い三博士が奮闘し、明治29年の民法制定に至ったという経緯があります。とは言え、ポアソナードの草案が、現在の民法の礎となっていることは間違いありません。最初の出発においては、お雇い外国人の手を借りなければ、民法という社会を支える基本法の立案をすることもできなかったのです。

昨年、この民法のうち、契約に関する債権法と呼ばれる部分の大改正がおこなわれました。約120年を経てはじめての抜本的な大改正でした。今回は全て自前で、しかも諸外国の法律との比較をしつつ、改正案を作成しました。120年の消化吸収を経て、日本独自の法の整備を自分たちの手で行ったのです。

現在日本は、政府開発援助（ODA）としてアジア諸国の民事基本法の整備を支援するという活動を行っています。政府開発援助というと、道路や橋の整備を思い浮かべる人もいますが、社会における様々な活動を支えるインフラであるという点では、法律も同じです。日本は、明治期に近代化を進める中で、ヨーロッパの法体系を受け継ぎながら日本の社会で使える形にして移植しました。先進国の中でこのような経験を持つ国は珍しいのです。この経験をもとに開発途上国への法整備支援をすることは日本の歴史的な特徴を活かした援助だと言えるのです。

さきほど、時に立ち止まってじっくり考え

ることが必要だといいましたが、時間を自分の思うように使うことができるという学生の特権を存分に活用してほしいと思います。大学院での研究生生活はその絶好の機会なのです。いったん社会に出ると、目の前の案件の処理を優先せざるを得なくなり、原点に立ち戻って考える余裕はなくなるというのが現実です。これから40年なり50年なり、知のプロフェッショナルとして、考え続ける力をぜひとも在学中に養って頂きたいと思います。

東京大学を活用し尽くす

最後に、皆さんにお願いしたいことがあります。それは、東京大学を素通りしないで下さい、ということです。東京大学というかけがえない場の中に深く立ち入って、東京大学を活用し尽くしてほしいのです。才能に恵まれた皆さんにとって、自分の専門について勉強をし、過去の例にならってそれをきれいにまとめるだけなら、それはそれほど難しいことではないでしょう。しかし、そこで、安易にわかったつもりにならないということが何より重要です。

見たこともないような、新しい問題、糸口がすぐにみつからないような難しい問題にぜひ果敢にチャレンジして下さい。これらを選択する理由を探することは容易です。しかし自分の時間がたっぷりあるという特権を活用すべきです。東京大学はそのような挑戦を行う最適な場所です。そこから逃げていては、東京大学に入った意味がありません。東京大学は、従来の枠にとらわれない発想を何よりも大切にします。キャンパスには、多彩な専門家がいます。その気になりさえすれば、世界をリードする第一線の専門家から直接学び、議論をして思索をめぐらすチャンスがたくさんあります。研究室で周りを見渡せば、自分にはない発想を持っている学友がいます。その中で切磋琢磨を通じて自分を鍛え、みんなで高めあうことも大いに期待できます。さらには、複数の領域に関わるセミナーやシンポジウムがキャンパスで毎日のように開催されています。時には自分の専門と遠いように見える分野のシンポジウムに参加してみるのも良いと思います。新しい発想のきっかけは、意外に近くにあるかもしれません。

皆さんは今日から、私達の仲間となります。私は総長として、皆さんが安心して最高の学

びと研究に打ち込めるように、大学院の環境を充実させていきます。また、皆さんが「研究する人生」に魅力を感じることができるように、研究者の雇用環境の改善にも努めていきます。

大学で学び、研究する私たちが果たすべき役割は、先人たちのためめ努力の中で蓄積されてきた成果を、敬意をもって継承し、さらに学

問を深めて新たな価値を創造し、変革し続ける社会をうまく駆動させる知恵を生み出すことにあります。私は21世紀を担う皆さんと共にその現場に立てることを、幸運だと思っています。共に夢を抱きながら課題の解決に挑戦し続け、新たな価値、そして伝統と一緒に創り出していきたいと思います。

皆さんが元気に活躍されることを期待しています。

研究科長式辞

東京大学大学院に入学・進学された皆さん、皆さんの新たな門出にあたり、心よりお祝い申し上げます。またご家族や関係者の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

大学院修了時の進路の選択が自分の職を決める選択になる

これから皆さんは大学院生として修士課程、専門職学位課程、博士課程において、それぞれの目的にむけて、研究に取り組まれることとなります。大学院に入学した皆さんにとって、大学院修了時の進路の選択が職を決める選択になります。現在、歴史上かつてない速度で社会が変化しています。この激しい変化の中で、自らのキャリアをどのように設計していくのかが、極めて重要です。

私自身のキャリアにおける転機について、少しお話ししたいと思います。私は1983年に本学工学部を卒業後、引き続き大学院工学系研究科に進みました。博士課程修了後に、九州大学工学部に助手として採用いただき、プロの研究者の道を歩みはじめました。三年間、九州大学で研究・教育に取り組んだ後、本学工学部附属総合試験所の助手に採用されました。当時、原子を一つ一つ操作する研究が発表されるなど、ナノテクノロジーが世の中の注目を集めはじめました。私は関連する分野の研究に大学院時代から取り組んでいましたが、21世紀に向けて何をすべきかを真

剣に考え始めました。その中で出あった材料が、私が現在も研究を続けているゼオライトという結晶材料です。ゼオライト結晶中には分子サイズの空間が規則的に配列しており、空間の形や大きさで分子を識別することができるのです。私はこの結晶の構造の美しさに魅了されました。どうしたらこのような構造を創り出すことができるのかを知りたくくなりました。私はゼオライト合成の研究を始めたくて、いてもたってもいられなくなりました。丁度その頃、オランダの大学と行っていた研究が様々なメディアで紹介され、関連の博士論文の審査を依頼されました。私はこの絶好のチャンスを利用して、ゼオライト合成の研究で私を雇ってくれる研究室を探すことにしました。現地での博士論文審査会の前後に二週間ほどをかけて、欧州と米国の七つの大学でセミナーを行い、私を売り込みました。最後に訪問したカリフォルニア工科大学で、ベストなオファーをいただき、一年間研究する機会をもつことができました。助手として研究をはじめて五年後、32才のときでした。帰国後は、研究室を移動し、助手・講師として三年余を過ごした後、助教授として自らの研究室を立ち上げることができました。私にとって、この助手時代の選択が、その後の私のキャリアを決定づけるものでした。

誰もが未来は現在の延長であると考えられるものです。今の自分はこうだから、このような選択をしようとするのは自然なことです。これをキャリアのフォアキャストと呼びましょう。大学入学、本学の教養学部在籍の方には二年時の進路選択、そして大学院入学と、皆さんにもこれまでに様々な転機があったものと思います。私にとっても、多くの転機での選択はフォアキャストによるものでした。一方で、助手時代の選択は、



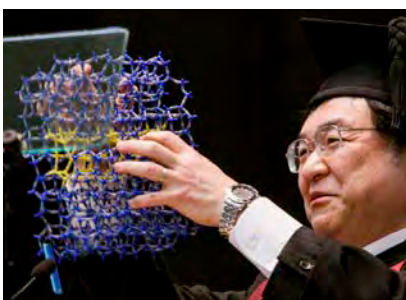
工学系研究科長

大久保達也

未来のありたい夢をバックキャストしたものでした。

未来の姿からのバックキャストによるキャリア設計を

さて、大学生・大学院生がキャリア選択に際し、勉学や研究の時間を犠牲にして就職活動に取り組まねばならない風潮が、昨今拡大しています。極めて深刻な状況です。学問を修める、そして研究を究めるためには時間が必要です。本学においては、一昨年度より、「本学卒業・修了予定者の就職・採用活動について」と題する採用する方々への要請を発表しています。一部を引用します。「本学では、本学の教育理念である『世界的視野をもった市民的エリート』の養成を基本としつつ、公共的な視点から主体的に行動し新たな価値創造に挑む『知のプロフェッショナル』の育成をはかり、卓越した専門性をそなえると同時に、多様な視点から自らの位置づけや役割を相対化することができ、謙虚でありながらも毅然として誇りに満ちた人間を社会に送り出す社会的使命を担っています。この本来果たすべき使命と責任を十分に認識し、その責務を果たすためには、就職・採用活動及び内定後であってもその秩序を維持し、正常な学校教育と学生の学修環境を確保することが極めて重要であると考えています」。大学院生の



皆さんにも、是非全文を読んでいただきたいと思います。本学においては、このようなメッセージを出すとともに、全学や各部局の学生支援部門で学部生・大学院生の就職の支援活動を強化しています。

現在、キャリアを考える上で、あまりにも多くの情報が溢れています。皆さんには、これらの情報に振りまわされることなく、未来のあるべき自らの姿を思い描き、そのバック

キャストイングによるキャリア設計を行っていただきたいと思います。皆さんが考えている以上に、皆さんのまわりに様々なチャンスが潜在しています。我々も皆さんの夢の実現に向け、引き続き万全の体制をとります。皆さんが、自らの夢をキャリアとして具現化されることを祈って、私からのお祝いのメッセージにかえさせていただきます。

祝辞

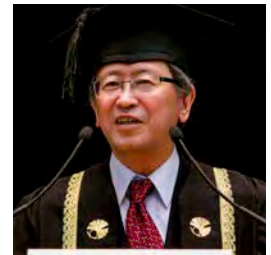
皆さん、この度は東京大学大学院に入学、進学まことにおめでとうございます。またご家族の皆様にも心よりお祝い申し上げます。私は東京大学の教員として、そして何よりも、これからの皆さんの同僚となる現役の一研究者として、皆さんにお祝いの言葉を述べるのできるのをたいへん嬉しく思います。私が大学院に進学したのは、42年前ですが、その時に感じた喜びと誇り、そして研究生活への胸の高鳴りは、大げさでなく、つい昨日のように感じられます。東京大学大学院は、学術と先端研究の最高峰であり、皆さんの夢や目標の実現をするうえで、最高の環境を提供してくれると確信しています。

私は、物性物理学を専門としています。物性物理学とは、物質のなかの電気的、磁気的な性質や機能を追求する研究分野です。エレクトロニクスは、今日の情報・通信社会を支える基盤技術のひとつですが、物質の中の電磁気応答の物理的理解がその発展を支えてきましたし、今後もその重要性は大きくなると思っています。少しだけ、関連する学術の歴史を振り返ってみたいと思います。19世紀の物理学は、「電磁気学」の時代であったと言ってもよいと思います。19世紀前半には、ガウス、エルステッド、アンペール、オームなど、現在、物理法則や単位にその名を残す科学者達によって、次々と新しい法則の発見がなされ、やがて、それらは、「マックスウェルの方程式」として、古典電磁気学が完成します。たとえば、今日の発電機などの基本原理となる効果にフェラデーの電磁誘導という現象があります。導線でコイル形状を作り、その中で磁石を出し入れしたりす

ると、コイルに電圧が発生するというものです。あるいは、逆効果として、コイルに電流を流すと磁場が発生すれば、モーターの基本原理となります。そもそも、電磁気学—electromagnetism—という名前自体が、電気で起こる磁気、という意味であり、このファラデーの法則のように、電気的作用と磁気的作用が不可分であることを明確に指し示したものとなっています。電磁誘導の原理なしには今日の人間社会は成り立たないものです。

電磁気学を固体や結晶に当てはめるとどうなるか

さて、このすばらしい電磁気学を固体や結晶に当てはめようとすると、どのようなことになるでしょうか。実は話はそれほど簡単ではありません。なぜなら、固体中の電気作用、磁気作用や両者の絡み合いを媒介するのは、固体中の多数の電子であり、電子の動きを正確に理解することが必要となります。たとえば、鉄や銅は同じように電気を良く流しますが、鉄だけが磁石にくっつく、あるいは磁石（強磁性体）になるのは、どうしてでしょうか。物質のなかの電子の動きは「量子力学」という電磁気学より半世紀以上も後に誕生した物理学の取り扱う分野です。しかし、この量子力学の基本原則がわかって、多数の電子の振る舞いを予測するのは至難の



東京大学卓越教授／国立研究開発法人理化学研究所 創発物性科学センター長

十倉好紀

業です。しかし、多数の電子がいればこそ、概念的にも新しい現象が起こりうるわけで、これは磁性しかり、超伝導（電気抵抗が消失する現象）しかりです。

これは、何も固体中の電子に限った話ではなく、多数のマイクロ要素が絡み合ったときに、個々の要素の現象の足し合わせだけでは、簡単に推測できないような劇的なマクロ現象が、サイエンスの分野ではしばしば起こります。「多は異なり」（More is different.）とは、ノーベル物理学受賞者で東京大学名誉博士のP.W.アンダーソン博士が物理科学の魅力を説いた言葉です。現代は「シリコン文明」といってよいほど、単純なバンド理論に基づく物性物理学が成功を収めました。しかし、固体の電子による新しい「電磁気学」の可能性は、実はまだ



無限にあります。私自身が研究活動のなかで40年も過ごしてきたのに、いまだに日々新しい現象の発見があり、背後の真理の探究に夢中になれる、これは研究者として至福という以外にありません。

さて、私がこのように楽しそうに研究の話をしていると、「研究者として一番大事なことは何ですか」と訊かれることがよくあります。大学の教員としては、「勉強することがまず大切です」といつも答えますが、実はもっと大切なことがあると思っています。どの社会、職業にも共通することですが、特化した才能、段取り力、協調性、コミュニケーション能力、人柄、幸運など、どれも研究者としての成功には必要なものです。しかし、どれかが少々欠けたとしても、他に補う十分の長所があればよいことも多くあります。ことほどさように、人の価値、才能は多様です。しかし、仕事を発展させるには、必要なことを常に学び続けることや真理を探究し続けることが必要ですが、これには才能というよりはサイエンスに対する「情熱」や「動機」が最も重要なのです。

おそらく、後1~2年もすれば、皆さんが情熱をもって研究することについては、ごく狭い領域からかもしれませんが、あなたが指導教員を超えて、世界で一番の物識り、深い理解者になっていると思います。そう実感する日が

きつとすぐに来ます。それさえできれば、そこを拠点に、自分を発展させていくことができます。自分の長所を生かして、そして、「学び」によって自分の短所を薄めればいいのです。そうすることで「学ぶ」ことが大きな喜びに変わるはずですよ。

科学者としての才能のジャンプは20代半ばで起こる

私は高校生のころ、伝手をたよって、ある高名な大学教授のもとに行き、「科学者になりたいのですが、どうしたらよいでしょうか」と、幼い質問をしたことがあります。その先生がおっしゃったのは、「科学者としての才能のジャンプは20代半ばで起こる。ある時、泥をかぶった地蔵からさっと泥が落ちて、突如輝きだす。君もそうなるかも知れません」。素直な私は、この言葉を大学院に入学するまでずっと信じ続けました。私のその後の30年の大学院教員としての実感としても、この法則は大変正しいものと思っています。中国の古典の三国志演義に、呉の国の武将の呂蒙の逸話があります。見違えるように成長した呂蒙が幕僚に発した言葉に、「士別れて三日なれば、即ち刮目して相待つべし」、すなわち、日々鍛錬する人が居れば、その人は3日も経つと見違える程成長しているものだ、という言葉があります。全くその言葉通りに、私は

日々接する大学院生たちが、わずかな期間にありありと一皮むけたように成長していること、あるいは泥が見事に落ちて金ぴかの地蔵が現れていることをしばしば目撃します。

さて、これから付け足すのは、皆さんが泥のきれいに落ちた地蔵になってからの話です。小さな分野・専門ではすでにあなたは世界一になっています。その経験をもとに、あなたの夢や人生の目標を再構築してください。その折には、あなた自身が人類社会の一員として、人類の幸福にどう貢献ができるかも、あなたの新しい夢と目標に取り入れてください。東京大学大学院は、それに至るまでの最高の「学び」の環境を提供してくれるでしょう。

皆さんの大学院生活が実り多きものとなり、幸多き人生を歩まれんことを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。



入学生総代宣誓

情報理工学系
研究科
都竹雄介さん



本日はこのような素晴らしい入学式を挙げていただき、心より感謝申し上げます。これから素晴らしい環境と多くの時間に恵まれて研究に集中できることを嬉しく感じています。この様な学問に浸れる機会を与えてくださった両親をはじめ、先生方、学友に感謝の言葉を伝えたいと思います。

さて、近年では、人工知能やAIといった言葉がよく聞かれるようになりました。それらが注目を得るきっかけの1つ

を担った Deep Learning と呼ばれる手法があります。その前身となった技術には、長く冬の時代がありました。これを乗り越えたのは、注目を浴びることもなく、懐疑的な目を向けられようとも、直感と可能性を信じ諦めることを知らなかった先人の不断の努力でした。私たちのこれからの研究生活も、すぐに成果が出ることも、努力が報われることも限らない中で模索していくことになると思います。しかし、先人の姿に学び、自身の直感や知的好奇心の指す方を信じ、徹底的に考え抜く勇気を、私たちが忘れず挑んでいきたいと思っています。

また、現在、人工知能と称される技術の集合は、多岐にわたる基礎研究の上に支えられています。そこでは、一見しただけではお互いがどの様に繋がるかが

わからない多様な分野での積み上げが重要な役割を担っています。このことは、直接は自身の研究と関係ない様に見える分野への敬意を忘れず、その英知を積極的に取り入れていくことの大切さを語りかけるかの様に感じます。幸いなことに、ここに集う私たちは、背景も専門も多様な人によって構成されています。分野の垣根にとらわれず、幅広い人々と多くの議論を交わすことで、互いに人類の英知をおし拡げるために邁進してゆきたいと思えます。

しかし一方で、AIという単語が万能の技術であるかのように語られることには危機感も覚えます。科学の可能性に魅せられるだけでなく、その限界とも向き合わなければなりません。魅力的な言葉に踊らされず、着実な歩みを持って世界

を牽引していくことに私たちの使命があると考えています。そして、知の力こそがそれを支える源であり、私たちがこれからの学生生活で磨き続けなければならないものだと思っております。

よって私は本学新入生を代表して宣誓します。学を志す者としての矜持を常に忘れず、先人の積み上げた学知に敬意を払い、真摯な学究に努めることをここに誓います。最後に、私自身も情報理工学の学徒として、百折不撓の精神で自らの研鑽を絶やさぬことを改めて近い、宣誓の言葉の結びといたします。

ひょうたん島通信

大槌発! 第43回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



ひょうたん島の“ありがたい”磯

大土直哉 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
生物資源再生分野 特任助教

今年2月から国際沿岸海洋研究センターに特任助教として着任したオオツチです。お気づきの通り、姓が大槌と同じ音ですが、私のツチは土曜日の「土」、つまりグランメーユ (Grand Maillot) ならぬグランテール (Grand Terre) です。私の着任後まもなく、沿岸センターは旧研究棟よりもやや陸側の高台に移転しました。海側の居室からは、蓬萊島を含む、大槌湾湾央の風景が一望できます。しかし、残念ながら、眺望の良さと海岸の近さは往々にしてトレードオフの関係にあります。新研究棟の玄関を出てから船着場までは徒歩で5分、蓬萊島の磯まではさらに5分——臨海研究施設にしてはすいぶん海岸から離れた気がします。

とはいっても、三陸南部沿岸域において、いつでも歩いて行ける場所に磯がある、ということは、とても「ありがたい」ことなのです。なぜなら、三陸南部には、地質の特徴のせいで、アクセスしやすい磯がもともと非常に少ないからです。例えば、三浦半島は、およそ1700万年前に出来た日本で最も新しい付加体ですが、これを構成するのは主に砂泥や火山噴出

物からなる堆積岩、つまり比較的脆い岩石です。このような岩石でできた岩場は、波浪で削られやすく、実際、半島の沿岸には無数の海食台が形成され、老若男女の磯遊びの場となっています。一方、

三陸南部沿岸はおよそ4億4000万~1億2000万年以上も前の、日本で最も地質年代が古い地域。石灰岩や花崗岩など非常に堅い岩石が削られて出来たリアス式海岸ですので、よほどの力がかからない限り地形は変わりません。海岸線はほとんどが崖で、磯があったとしても崖崩れの跡のような危険な場所ばかりです。大槌・釜石の沿岸も、このような磯のできにくい地域にあるため、私は、実際に訪れるまで、沿岸センター周辺で潮間帯の調査はできないものと思込んでいました。でもありがたい磯はあったのです！ところが『東京大学海洋研究所国際臨

弁天様が見守る蓬萊島の磯。



海研究センター報告』のバックナンバーに、蓬萊島の磯に関する研究事例は見当たりません。「赤浜の東大」こと沿岸センターが、赤浜のシンボルである蓬萊島を調べていないのは、とても意外に思えます。今年度は、一般向けに公開する展示室の開館も控えていますので、これからは身近なものにこそ関心を持っていただければならないでしょう。このことに着任早々に気づけたことを幸運だったと思って、近い将来に、この小さな磯から「ひょうたん島の自然誌」をみなさんにご紹介できるように、今後も調査を継続していきたいと思っています。

調査船「弥生のつばやき」 新たな船出



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早4年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、センター界隈の最新トピックをお伝えするこのコーナーも担当しています。

待ちに待った新センターがついに完成しました。係船場の工事が先行したため、これまでは我々だけでしたが、震災から7年を経てようやく教職員一同揃っての新たな船出となりました。引っ越し作業の終わった旧センターは、ひと気も絶えてひっそりと静まりかえっています。この建物は1975年2月に竣工していますので、実に43年の長きにわたり日本の沿岸海洋研究の一翼を支えてきたこととなります。我が国の著名な海洋科学者にも、

大槌での日々を青春の1頁に刻んだ方も少なくありません。私には想像することしかできませんが、優秀な若者たちが自ら海へ出て、新しい知見を見いだす時、そこには途方もない熱気や感動が生まれるでしょう。そうしたエネルギーの全てを、この建物が受け止めてきたのだと思うと感慨もひとしおです。東日本大震災によって被災した国際沿岸海洋研究センターは、一つの時代の幕を閉じることとなります。2018年度より始まった新たな歴史が、これまで以上

に長く、熱く、全ての人たちに感動を与えるものになることを願ってやみません。



強者どもが夢のあと。現状では取り壊しの日程も未定です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

総長室だより

第9回

～ 思いを伝える生声コラム ～

東京大学第30代総長

五神 真



「Go Global Gateway」にこめた思い

「タフでグローバルな東大生であれ」というのは、濱田純一前総長が学部教育の総合的教育改革のスローガンとして強調された点でした。私がバトンを引き継いでから、世界の変化は格段にスピードアップし、社会の課題もより難しくより複雑になっていると感じます。世界の様々な人々の知恵を組み合わせ、積極的、能動的な選択により課題を解決していかねばなりません。そこで、まず必要な力は、多様な他者を理解し、その強みを見出して協力し合うコミュニケーション力です。私は、これこそが、現在の「タフでグローバルに」だと感じています。これまで、総合的教育改革の一環として、様々なプログラムを創り、提供してきました。語学や外に出て行くことが得意な学生諸君がこれらのプログラムを大いに活用してくれ、優れた成果が上がってきています。しかし、東大生は皆非常に高いポテンシャルを持っているので、もともと国際派の学生だけでなく、もっと多くの学生に積極的に有効活用してもらえたいと考えていました。

まず、自分の意志を国際的な環境で、しっかり伝える力を身につけておくことが大事です。特に、英語で書く力と話す力を鍛えることは重要です。2015年より、学部1年生向けの必修授業FLOW (FLuency-Oriented Workshop) が導入されています。ネイティブ教員が担当し、少人数授業で英語でのアカデミックな討議力を鍛える授業です。英語で話す自信と、その後自分でトレーニングし続けるためのコツを身につけることができます。英語での論文執筆・発表を念頭に置いたALESS、ALESIAは既に定着していますが、これと並び、東大ならではの時代を先取りした取り組みです。これらは必修ですので、全ての学生が受講します。その他のプログラムも、すべての学生の「国際総合力」を伸ばすために活用する方策を検討しました。その結果、今春の新学部1年生から導入したのが、国際総合力認定制度 (Go Global Gateway) です。東京大学が提供するプログラムに参加する中で、個々の学生の国際総合力の向上に向けた学習や活動を認定し、それらの効果を可視化する仕組みです。学生が達成度を実感しながら自らレベルアップできるようにするための制度です (特集頁参照)。

新しい試みなので、学生教員双方からの積極的なフィードバックが必要です。みなさんとともに、仕組みをより効果的なものへと高めていきたいと思っています。今春の新入生、つまりUTokyo 3.0の最初の年に入ってきた学生には、それを使命と感じて、次に続く後輩を先導してほしいと期待しています。(つづく)

シリーズ 第13回 連携研究機構

感染症
連携研究機構 の巻



話／機構長
河岡義裕先生

世界の感染症を制圧するために

——どのような機構なのか教えてくださいませ。

「その名の通り、様々な分野の先生と連携して学際的に感染症研究を進める仕組みです。研究者同士の個々のつながりが集まれば新たな出会い、新展開が生まれます。AとB、BとCが連携していたとして、それをまとめるとAとCのつながりもできますよね。いままで考えなかったような展開ができるだろう、面白いぞ、と思い、2017年の春頃から構想を温めてきました」

「目的は、多種多様な病原体に対応可能な研究体制の整備、革新的な予防法・診断法・治療法の開発と、次世代の感染症研究を牽引する人材の育成です。医科学研究所を軸に、医学系、農学生命科学、薬学系、理学系、工学系、新領域創成科学、総合文化、生産技術研究所とともに、国際的に卓越する拠点を構築し、感染症発生状況の正確な情報を社会へ発信することを通して、最終的には新興・再興感染症を制圧します」

——たのしい言葉ですね。たとえば、工学系や理学系の先生とはどんな研究が展開されそうですか？

「たとえば、マイクロ流体チップというデバイスでウイルスを単離する研究です。現在は人間の細胞を単純化した培養細胞を実験に使っていますが、これはいわばすべてを集団として見る形です。そうではなく、1個の細胞と1個のウイルスの対応を調べることができるようになります。我々だけでは無理ですが、工学の技術があればできるでしょう。理学系の先生に期待しているのは、インフルエンザがどのように広がるかというモデルの開発です。私は、数学ができないと感染症の世界では生きていけないと学生に教えているほど、感染症研究は数学と近づいていくと考えています」

——文系分野との連携はいかがでしょうか。

「先日、日本哲学会で講演させていただく機会があり、ウイルスが軍事的に使われる可能性について、いわゆるデュアルユースの話題を話したところ、倫理の先生から強い反応があり、刺激を受けました。自分の研究だけやっていけばいいという時代はすでに過ぎ去り、研究が世にどのような影響を与えるかまで考えないといけなくなっています。こうした状況では、哲学をはじめとする文系の学問の影響力も大きくなると感じています」

「ただ、機構はできたばかり。春以降に1回目のシンポジウムを開催して進めている共同研究を発表し合い、出会いの場とするつもりです。感染症の最先端研究を進めるこの仕組みは、閉ざされたものではありません。もし興味がわいてきたら、いっしょにPassionをもってMissionを遂行しましょう。Save the World!」

ワタシのオシゴト 第144回

RELAY COLUMN

医学部附属病院研究支援課
外部資金チーム 専門職員 **菅波明子**

スタートした研究支援課でのオシゴト



職場にて。

竜岡門からバス通りを入り、右手病院地区の人々が行き交う外来診療棟前を通り抜けて進むと、どっしりとして玄関から歴史を感じる管理研究棟があり、この建物の奥に私の所属する研究支援課があります。3月までは管理課研究支援チームでしたが4月に独立して誕生した超フレッシュな課です。

私はこの課の外部資金チームに所属して民間企業との共同研究・受託研究の受け入れを担当しています。病院の共同研究等の件数は年々増え、特に3月は契約更新や新年度契約の依頼が集中します。頭の中に？が並ぶ理解が難しい課題から自分や周囲を振り返ってしまうような日常的な課題まで研究課題は多様で、時には「人々のために研究頑張ってください」と言いたくなる課題があったりと、医療というものの幅の広さを改めて感じることも多い毎日です。初めての病院勤務で組織や制度が当初はよくわからず戸惑うこともありましたが、周囲に支えられてなんとか仕事をしてきました。

仕事以外では、入職以来、何度も途切れていますが昼に御殿下の体育館で体を動かしています。仕事を離れて頭を空っぽにできる時間が好きです。病院にきてからはご無沙汰なのでそろそろ再開しようと思うこの春です。



病院前の桜の下で同じ部屋のメンバーと。

得意ワザ：パソコンの基本についての質問をしつこくできる
自分の性格：心配性のち開き直り
次回執筆者のご指名：坪内一彦さん
次回執筆者との関係：元後輩、10年以上続く年賀状友達
次回執筆者の紹介：聞き上手、怒るところを見たことがない

IRデータ室
よもやま話

第3回



理事・副学長
IRデータ室長 **羽田 正**

見習い室長2年目

2016年度の末に、来年度はIRを担当してほしいとの話を頂いた時、恥ずかしいことに、私はそのIRという単語の意味をよく知らなかった。インターネットで調べてみると、Investor Relationsの略で「投資家向けの広報」とある。大学に資金を提供して下さる方々に必要な情報を効果的にお知らせする係かと納得していたところ、設立予定のIRデータ室を担当する課長に内定していた青木志帆さんが訪ねてきて、懇切丁寧に仕事の内容をお話し下さった。彼女の説明によって、本学で使用されるIRという語はInstitutional Researchの略であることをはじめて知った。青木さんは私のあまりの無知ぶりにあきれたに違いない。

それから1年が経った。見習いとしてゼロからのスタートだったが、この間、ほぼ毎月開催されるIRデータ室会議に室長として出席し、5人の有能な副室長の方々と本部の各部から派遣された室員たちによる報告と議論を聞き、時には意見を述べながら、「修行」を続けてきた。教育、研究、社会連携と運営に関わる様々なデータが学内各所で発掘され、IRデータ室に集められ、それらを統合・加工して分かりやすく提示する仕組みが作られてゆく様子を目の当たりにした。私なりにIR活動の重要性と意義が理解でき、関係者の能力の高さ、熱意と努力を身近で感じて、しばしば感動を覚えた。

その一方で、依然として、まだよく分からないことも多い。そもそも、多岐に亘る学術活動の総体を、一体どこまで正確にデータとして指標で示すことができるのだろうか。例えば、様々な「出口」とつながる教育の効果は、数字で定量的に表せるものなのだろうか。学部学生と大学院学生の教育効果を、同じ指標で論じられるだろうか。研究活動のデータ化も簡単ではない。インパクト・ファクターの高い雑誌への論文掲載だけが一流の研究者の証明ではないはずだ。分野によって多種多様な研究の成果を、一律に数字にして単純に論じるなら、世界大学ランキングを批判することはできなくなる。各種学術活動の成果は、そこに投じられた資金の額とどこまで直線的に結びつくのだろうか。これらの多くは、多分、私が定量的な分析を本領としない人文学研究者であるがゆえの問いであり、もう答えは出ているのかもしれない。

うーん、それにしても難しい！ まだ見習いを続けるしかなさそうだ…。頼りない室長とは対照的に、これから当欄に執筆予定の副室長たちとIRデータ室の職員はきわめて優秀だ。引き続き彼らに鍛えられ、今年度中には「見習い」を返上でできればと考えている。

IRデータ室 ir-data.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

インタープリターズ・バイブル 第129回

情報学環教授
教養学部附属教養教育高度化機構 佐倉 統
科学技術インタープリター養成部門

科学技術インタープリターとしての書評

今年（2018年）の3月まで、『朝日新聞』の書評委員を4年務めた。とても楽しい仕事だった。

ぼくが書評のおもしろさに開眼したのは、大学院時代に読んだ、進化遺伝学者リチャード・ルウォンティンの書評がきっかけだ。1976年に出版されたリチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』を取り上げて、『ネイチャー』で激しく批判したのである。タイトルは"Caricature of Darwinism"。ある理論でなんでも説明できてしまうように展開するのは、その理論のパロディなのだ、まちがった解釈なのだ、という主旨である。

それまで、そこそこ誉めてチャンチャン、みたいな毒にも薬にもならない書評しか知らなかったぼくは、書評ってこんなに批判的で厳しくて、でも生産的でありうるんだということに改めて目を開かされた。

ルウォンティンのこの書評をひとつの皮切りとして、いわゆる「社会生物学論争」が始まった。ドーキンスは、人間を含めて動物の社会的行動を適応論の枠組みで説明しようという社会生物学（行動生態学）の華々しい旗手だったから、いつも批判の矢面に立たされたが、彼も黙ってはいなかった。ドーキンスによるルウォンティン批判も、なかなか厳しい書評がたとえば『ニューサイエンティスト』などに載っている。

このように、良い書評は学問のダイナミズムを伝えてくれる。単行書には、著者の世界観や価値観が原著論文よりはるかに明確に打出されている（だから単行書は共著が原著論文より少ない）。それを対象にする書評も、書き手の考えかたや、ときには人となりや、論文よりも強く前面に出てくることになる。

科学技術インタープリターの一環として、書評の役割やあり方なども、検討してもいいのかもしれない。



ルウォンティンによる『利己的な遺伝子』の激しい批判的書評。『Nature』Vol.266（1977年3月17日号）より。

science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

UTokyo バリアフリー最前線!

第7回

障害がある職員のお仕事拝見①



ことまくだん

聴覚障害の当事者として支援を補佐

——どんな仕事をされているんですか。

「障害がある学生や教職員への支援のコーディネーターです。音声を変換する「UDトーク」、パソコンの画面情報を読み上げる「スクリーンリーダー」などの

支援機器貸し出し、部局の現場での支援に関する助言、調整連絡などを行っています。昨年3月までは東海大教務課で成績・試験関係の仕事をしていました」

——代表的な一日の仕事の流れを教えてください。

「メールを確認した後、打ち合わせや部会などの会議資料の作成です。年度初めには必要な支援や障害状況を一人ずつ確認する面談を行ったり。講習会を企画することもありまして、先日は支援スキル養成講座を行いました。講師も務め、講義内容を要約して文字化する「ポイントテイク」の指導、音声認識ソフトの修正のやり方、障害に関する基礎知識などを話しました」

——ご自身はどんな障害を持っていますか。

「感音性難聴という生まれつきの聴覚障害で、聞こえる音が小さく、歪んでいるというものです。「山本さん」と呼ばれても、ゴニョゴニョとしか聞こえません。補聴器を外すとほぼ何も聞こえないんです」

——あれ、UDトークがoffでも話が通じてませんか？

「口の動きや表情などから判断しています。高3まで通った聾学校で訓練していたので、発話もある程度できるんです。そのせいで誤解も多いですが、UDトークは優れたアプリですが、使い方にコツがあります。たとえば複数人が同時に話すときNGだし、名乗らずに話すとき誰の発言かわからずに困ります。そうした基本ルールをお願いすることも多いですね」

——今後の仕事の目標などを教えてください。

「今は補助的な役割ですが、将来はメインで支援コーディネーターができるようになりたいです。目標は上司の中津真美先生です。支援室のスタッフは、障害とは何か、支援のあるべき姿とは何かを理解して活動しています。この理解と支援を大学全体に広げたいんです。ここに来て、自分の障害以外の障害への理解が甘いと気づき、支援現場での勉強がもっと必要だと感じました。コーディネーターは中立ですが、自分と同じ障害の方が来るとつい力むこともあります。公平な立場で、かつ当事者視点からの支援を心がけたいと思います」

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

トピックス 全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
3月9日～ 3月30日	広報戦略本部	ホームランを狙わない「夢の新素材」開発者／身近なテーマを掘り下げること、古代の歴史を見直す／ダーウィンとウォレスの150年来の謎を解く／宇宙誕生の謎に迫るヒッグス粒子を発見／普遍的な「保育の質」を求めて／チャレンジし続けることで社会に貢献する／先人たちの業績の上に、ひとつ小さな石を積み上げる／物理の法則は普遍生命に迫れるか？／イヤな目に遭うことも面白い／経済学で未解決の経済危機の発生と対応について／科学にもドラマチックなストーリーを／脳には視覚野や聴覚野があるのに、なぜ時間野はないのか？／新しいアイデアで、地球温暖化のメカニズムを探究／スパコンの高速化に挑むマイベースな数値計算研究者／地震予知はできるのか？その解明に挑む／科学をアートする心を大切に／固体中の電子が生み出す多彩な世界を切り開く／境界を設けずに取り組む／セントラルドグマに反するRNAワールドの不思議／(UTOKYO VOICES)	12月4日～ 2月19日
3月9日～ 4月2日	本部広報課	次世代にバトンをつなぐ／教職員の雇用環境改善に向けて／100年スケールの学問／ダボス会議で感じた東大の役割ほか（総長室だより）	8月25日～ 3月26日
3月9日	低温センター	低温センター設立50周年記念式典・記念講演会・記念祝賀会	2月21日
3月12日 ～4月10日	広報室	広報誌「淡青」36号を発行しました／ゆらぎ渦巻く情報造形の世界／画像でたどる東大140年／構内図と分布図でたどる東大キャンパスの変遷(淡青36号)	3月9日
3月12日	学生相談支援課	2019年3月卒業・修了者対象 東京大学キャリアデザインセミナーの開催	3月1日
3月13日	教育学研究科・教育学部	グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム	2月18日
3月13日	総合技術本部	第2回東京大学技術発表会開催報告	2月15・16日
3月14日	史料編纂所	国際研究集会「ドイツにおける日本中世史研究の現在」を開催	3月9日
3月14日	グローバルキャンパス推進本部	五神総長が2018年ソウル大学校入学式へ出席	3月2日
3月22日	本部総務課	平成29年度学位記授与式を挙げる	3月22日
3月23日	本部総務課	平成29年度卒業式を挙げる	3月23日
3月27日	本部学生支援課	平成29年度 フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会開催	3月7日
3月28日	グローバルキャンパス推進本部	第4回戦略的パートナーシップシンポジウム開催	3月6日
3月29日	法学政治学研究科・法学部	東京大学—ソウル国立大学国際ワークショップ「人工知能・経済・法」開催	3月5日
3月29日	法学政治学研究科・法学部	第四回東京大学—北京大学フォーラム（2018年3月10-11日）	3月10日
4月2日	先端科学技術研究センター	いわき市との間で連携および協力に関する協定を締結	3月20日
4月3日	産学協創推進本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」「年次総会」を開催	2月23日
4月6日	理学系研究科・理学部	「東京大学光イノベーション基金10周年記念の集い」開催	2月22日
4月6日	宇宙線研究所	飛騨市から宇宙線研への寄付金贈呈式が開催されました	3月30日

部局長交代のお知らせ https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00025.html

2018年4月1日付で下記のとおり部局長の交代がありました。
新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は上記URLをご覧ください。

	新部局長	前部局長	新部局長	前部局長
大学院薬系研究科長・薬学部長	一條秀憲	新井洋由	社会科学研究所長	佐藤岩夫 大沢真理
大学院数理科学研究科長	河野俊丈	(再任)	生産技術研究所長	岸利治 藤井輝夫
大学院情報理工学系研究科長	石川正俊	(再任)	史料編纂所長	保谷徹 山家浩樹
大学院情報学環長・学際情報学府長	田中秀幸	佐倉統	宇宙線研究所長	梶田隆章 (再任)
大学院公共政策学連携研究部長・教育部長	高原明生	飯塚敏晃	物性研究所長	森初果 瀧川仁
			附属図書館長	熊野純彦 久留島典子

●五月祭のお知らせ／第90回五月祭が5月19日(土)・20日(日)に開催されます。今回のテーマは「洞を巻く」。公式ウェブページからマスコットのめいちゃんに質問を送ると五月祭の「めいちゃん工作ひろば」で答えてもらえるかも！



CLOSE UP 低温センター設立50周年記念式典を開催

(低温センター)



式辞を述べる大越センター長。

2月21日、低温センター設立50周年記念式典、記念講演会、記念祝賀会が、伊藤国際学術研究センター謝恩ホールおよび多目的スペースにおいて開催されました。大越慎一センター長の式辞に始まり、大学執行役・副学長 相原博昭教授、小林俊一元センター長、東北大学金属材料研究所極低温科学研究センター長 佐々木孝彦教授、理学系研究科長 武田洋幸教授および工学系研究科長 大久保達也教授よりご祝辞を頂きました。その後、島野教授より低温センターの現況報告がなされ、続いて同時に開催した学内寒割

利用研究室若手研究者による研究交流会のAward表彰式が行われました。

記念講演会では、元センター長 福山寛理学系研究科教授・低温センター兼任教授、前センター長 樽茶清悟工学系研究科教授、田之倉優農学生命科学研究科教授、十倉好紀工学系研究科教授・東京大学卓越教授の講演が行われました。講演会後には多目的スペースにて記念祝賀会が開催されました。式典、講演会、祝賀会の参加者は総計209名でした。当日は低温関連企業10社によるブース出展も行われました。



CLOSE UP 第2回東京大学技術発表会を開催

(総合技術本部)



挨拶する光石総合技術本部長。

総合技術本部は、2月15日、16日の2日間にわたり、駒場キャンパスにおいて「第2回東京大学技術発表会」を開催しました。

本発表会は、本学の教室系技術職員が有する新規性、進歩性、有用性のある専門的知識を発表、討議する場であり、専門技術の交流と相互啓発を推進することを目的として隔年で開催しています。発表会では口頭発表、ポスター発表のほか駒場キャンパスにおける技術職員の活動

の現場を紹介するため、研究室や研究教育支援施設などを訪問する施設見学会が実施されました。両日に渡り学内外から200名を超える参加があり、日々の業務から生み出された創意工夫や優れた業務実績等の報告が行われました。専門的技術の共有をはじめ、所属する部局を越えた技術職員間の更なる強い繋がりを得ることができ、本学の教育研究能力の一層の向上につながることを期待されます。



CLOSE UP フィールドスタディ型政策協働プログラム報告会を開催 (本部学生支援課)



ポスターセッションの様子。

3月7日、本郷の工学部2号館にて、フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会を開催しました。プログラムに参加した学生、学生を受け入れた各自治体等関係者及び本学教職員等104名が出席し、五神真総長の挨拶の後、参加学生による各県の活動報告が行われました。

初年度となる本年度は、趣旨に賛同した「自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク」加盟の10県（青森、石川、福井、山梨、長野、三重、鳥取、高知、宮崎、鹿児島）が、学生を受け入れてくださいました。学生たちは、

各県における活動の様子や約1年間取り組んできた課題解決への道筋提案などを報告しました。

報告会後には各県のポスターセッションが行われました。セッションの運営は参加学生が担い、各所で活発な議論が行われました。引き続き行われた懇談会は、学内外の関係者が活動を振り返り、意見交換をする有意義な機会となりました。地域と本学が繋がりを深めると同時に、多様な関係者と協働し、社会的課題にチャレンジするリーダー人材育成の一端を担えたことはプログラムの重要な成果となりました。



CLOSE UP 国際ワークショップ「人工知能・経済・法」を開催

(法学政治学研究科)



ワークショップは、東京大学一ソウル国立大学戦略的パートナーシップの一環として行われました。

3月5日、本郷キャンパスにおいて、法学政治学研究科が主催者、政策ビジョン研究センター、次世代知能科学研究センターが共催者となり、国際ワークショップ「人工知能・経済・法」を開催しました。本学からは法学政治学研究科、経済学研究科、次世代知能科学研究センター、生産技術研究所次世代モビリティ研究センター等に所属する教員が参加。ソウル国立大学からはビッグデータ機構、法科大学院、電機・コンピュータ工学科から法律学および工学、情報科学の幅広い分野の専門家をお招きし、人工知能の応用における社会的影響と課題について学際

的な議論を行いました。

ワークショップは「人工知能は社会をどう変えているか」、「自動運転と法」、「人工知能と金融革新 (Fintech)」の三部構成で行われ、第1部では産業構造、教育、保健・医療サービス分野など人々の暮らしに密接に関わる分野での人工知能の社会的影響を学際的視点から議論し、第2部、第3部では「自動運転」と「Fintech」という具体的な応用分野における課題について、報告と質疑応答を行いました。本学とソウル国立大学は人工知能をはじめとする新興技術に関する学際的な議論を進展させていく予定です。



東大オーケストラ100周年

東大オケ（東京大学音楽部管弦楽団）が2020年に百周年を迎える。正確には東京大学音楽部の創立百周年であり、音楽部は現在、管弦楽団、合唱団コーラアカデミー、女声合唱団コーロ・レティツィアの3団体から構成されており、前者2団体は実質的に100年の活動実績を持っている。東大オケでは記念事業が企画され、その準備が進められている。東大基金に寄付受付の窓口もできた。

筆者は学部の4年間「東大オケ」に所属し、3年までは毎朝部室に通学して、そこから講義や実験に向かい、終われば部室に帰ってくる、という生活を送っていた。さすがに4年になって卒論が始まってからは、研究室を抜け出してオケの練習に通うというスタイルに変わった。東大オケ出身者で研究者になった者の共通した言い訳に「大学院に入ってからまじめに勉強（研究）しました」というセリフがあるが、最近もこれを目にした記憶がある。オケ部員は必要に迫られて時間の使い方がうまくなる、という面もあると思う。

卒業して年数が経つと、不思議と当時のオケ仲間も世の中でけっこう偉くなっており、人並み以上に大活躍している人も多い。学生の頃には全く想像もできなかったことだ。学内を見ても、過去現在にわたりオケOBの部長が少なからず存在し、理事もいた。学生時代にあれだけオケ活動に入れ込んで少なからぬ時間を割いていた人々が、どうして？という気もするが、もしかすると、のめりこむ対象がオケから別のものに変っただけ、ということなのかもしれない。

自分自身を振り返ると、東大オケに4年間在籍したおかげで、その後の人生の充実度が

だいぶ上がったように思う。良かったことは、トレーナーの先生方のおかげで楽器の腕が上がり、合奏技術も身に付き、また多くの先輩・同級生のおかげで音楽に関する教養レベルが向上し、雑学も仕入れることができた、というだけではない。100人以上の集団であるオーケストラは人間社会の縮図であり、社会勉強という面でも意味があったと思う。100人規模の団体をほぼ学生だけで運営するということは、当時は人間の未熟さゆえにさほどのこととは思っていなかったが、今から思うとなかなか大変なことだ。

また専門の異なる学生、特に文系の学生と直接付き合うことができたのも意義深かった。この世には根本的に発想の違う人間がいる、ということに気づかされたこともあった。総合大学とは言え、単に大学のカリキュラムをこなしているだけではなかなか文系と理系の学生どうしの接点は生まれない。欧米における学生寮や英国のカレッジのような機能を日本ではオーケストラだけでなく、一般にサークル活動が担っているような気もする。

100周年の先の東大オケがどうなっていくのかはよくわからないが、100年続いたということは、かなり良いシステムが維持されてきたということだろう。もちろん時代の変化に即して組織も変化する必要があるだろうが、これからも現役学生にとっては本格的な演奏活動が可能な場として、OBにとっては在籍していて本当に良かったと後からも思えるような団体であってほしいと思う。

志村努

(生産技術研究所)